

## 二つの従軍記

大原, 長和  
九州大学名誉教授

松浦, 長彦

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化学府地域資料情報講座

<https://doi.org/10.15017/13998>

---

出版情報 : 比較社会文化. 15, pp.1-25, 2009-03-25. 九州大学大学院比較社会文化学府  
バージョン :  
権利関係 :

## 資料

### 二つの従軍記

本年(平成二〇年)度、服部は記念誌『青春群像 さようなら六本松 一九二二福高  
— 九大二〇〇九』の取材・執筆・編集に編集委員長として従事した。多くの方々に取材  
する過程で、興味深いお話をいくつもお聞きすることができた。しかし直接六本松キャ  
ンパスに関与しない場合は、記念誌への掲載を見合わせざるを得なかった。そこで貴重  
な証言・記録を、順次紹介したいと考えている。ここではお二人の方の従軍記を掲載し  
たい。

うち、一人は九大名誉教授(教養部)の大原長和氏である。大原先生には聞き取り時  
のメモをもとに聞き草稿をみていただき、誤りを正し、不足分を加筆していただいた。  
つまり本稿は聞き草稿・インタビューである。大原先生がいわれるには、これでは従軍記で  
はなく不戦記であるとのことだった。帝国海軍のもろさ、悲惨であった末路は、関係者  
としてあまり書き残したくないというお気持ちも表明された。従軍した青年たちの海  
軍への複雑な感情は、平和な時代しか知らない現代人には推測が及ばない点がある。

しかしその場にいたものしか知りえないエピソードは、歴史の証言として貴重と思わ  
れた。この記録は先生の御意向とは異なる部分を含むかもしれないが、記録を残すこと  
を優先させた。この点はひたすら御海容を願うばかりである。

二つの従軍記(大原長和・松浦長彦・服部英雄)

1) 大原長和  
松浦長彦  
2) 服部英雄

もう一方は(旧制)福岡高校社会科学研究会にて左翼運動に従事し、のち東京帝大在  
学中に逮捕拘束され、活動の継続を断念した松浦長彦氏(故人)である。遺稿集『晨』  
として刊行されたものからの引用である。甥・松浦康夫氏より提供を受けたが、弱者へ  
の思いをこめた視点から、将校・下士官・兵、いずれもが狡猾で醜悪になる戦争を描写  
している。感銘する部分が多かった。埋もれさせてはならない従軍記と考える。両者を  
紹介する。なお大原先生の従軍時期は敗戦が決定的であり、松浦氏参戦の場合には日本  
はまだアジアを進軍中であつた。「日本軍の負けることを知らない時代」とある。従軍の  
時代背景が多いに異なっていた。

#### 大原長和海軍少尉・従軍記(聞き)

昭和一七年一〇月、山口高商から九州帝大に入学。戦中、入学時期はばらばらだった。  
われわれは一〇月入学で一年生。一七年四月入学だった奥田八二さんが一前期。我々は  
みな、所謂学徒出陣で兵役に服することになった。二年以上在籍していた者は東条英機  
の特別のお情けで仮卒業。補習を受ける条件で本卒ということだった。二〇年終戦で本

卒になったようだが、補習があったという話は全く聞いていない。

（一期下の）私たちは在学二年に達していない。仮卒にはならない。戦後復員し単位を取って卒業。戦死して帰ってこなかったものもあるけど、同窓会名簿にも名前がない。彼らは一身上の都合で休学し、復学しなかったという扱い。たとえば水井淑夫。九大でも対潜学校でも同期だった。終戦の一週間前に人間魚雷「回天」で突入し、二階級特進したが、かれの名前は九大のどこにもない。

一八年（一〇月二日）徴兵検査の後、東京では神宮外苑で出陣学徒壮行会が行われた。九大生は箱崎宮に参拝しただけだった。

\*折田悦郎『九州大学における学徒出陣』（平成二〇）によれば、九大での壮行会は一〇月一九日。臨時徴兵検査は一〇月二五日〜十一月五日。式典は勇ましいものではなかった。

——赤紙がくるんですか？

赤紙はきません。赤紙は二度目の召集の場合。徴兵検査を受けて、入隊のときはこない。徴兵検査に役場から兵事係がきている。わたしは糸島郡雷山村が本籍。本籍ごとに検査が終わったら兵事係に報告をする。わたしは雷山村兵事係に報告。

陸軍は一八年一月一日に入隊、海軍は二月一〇日に入団と定められた。

徴兵検査官は陸軍大佐、一人一人「お前は陸軍を希望するか、海軍を希望するか」と聞く。私の弟が海兵出身だった。「わたくしはできなかったら海軍を希望します」。検査官の手許には家族調書があるらしく、「兄さんも海軍志望か」といわれたので、ダメかなと思っただが、希望を叶えてくれた。

徴兵検査の結果を「何のなにがし、甲種合格」、「第一乙種」と大声で申告する。第二乙種。体格が少し貧弱。わたしとか心理の佐久間君などは第二乙種だった。ふつう第二乙種以下は兵役には取られないけど、この時代、われわれ第二乙種まで現役となった。

戦争に行くこと決まると、学生は多く帰郷した。教室はがらがらになったが、わたしは入営の前日だったか、前々日までだったか、講義を聞いた。最後に聞いた講義は堀豊彦教授の政治学だった。台北帝大の教授で一年前に九大にこられたばかり。政治学のはなしが、突然、松の木亡国論になった。松が生えたらその土地はダメ。松は強い植物で、ほかの木は生えきらんような荒地地にも根付く。痛烈な時局批判だった。あまりはつきりいっただけなら非国民になる。わたしは兵役に服している間中、ずーっと考え続けた。「日本の松の木はだれだ」。戦後復員するとまもなく西新のお宅におじゃましました。もつと教えをこいたかったが、先生はまもなく東大に移っていかれた。イギリス政治思想の翻訳がある（堀豊彦 1898〜1986、『中世紀の政治学』岩波書店1942、『デモクラシーと民主主義』停信堂1946、『政治学原論』東大出版会1959ほか）。その松を校章

にして、「松原に」を歌うのが九大。校舎があるところまで六本松。何かの因縁だろうか。

入学以来わたしは九大混声合唱団に属した。「北原白秋の夕べ」をラジオで放送したり、北原白秋作詞、信時潔作曲「海道東征」の公演をしたりした。「大和は国のまほろば」、物理の園田久さんはバリトン・独唱のスター。白秋の姪がわたしの従兄と結婚した。信時といえは私の祖母の妹は東京音楽学校で信時と同期生だった。この合唱団も時局に合わない解散を命ぜられた。

昭和一八年二月一〇日、相浦（あいのうら）佐世保第二海兵団へ、衛門をくぐったら向こうは地獄、猛訓練で死ぬかと思った。一つの班が約二〇人。本籍ごとにまとめられ、糸島、嘉穂がひとつの班を構成していた。わたしは、糸島は本籍というだけで住んだことはない。だから自分以外はだれも知らない。みな子供の時から知り合い、何ちゃん、何ちゃん、っていつている。わたしはだれも話相手がいない。

必死の思いの毎日であった。二等水兵は最下等だから、何から何まで自分でやらねばならず、上官のためには何から何までやってやらなければならない。たとえば散髪。丸坊主。バリカンでガリガリとやれという。自分の頭は刈れない。お互いにやりあう。下手にやると、痛い痛い逃げられる。それではこちらもやってもええない。身だしなみはやかましい。ほっているとおん殴られる。（しかたなく）日曜の外出許可が出たら、真っ先に床屋に行って、つんでもらう。連中はバリカンでお互いつみあってベチャクチャしゃべる。「ふじこしやんが」、「ふじこしやんが」、といつている。年は同じ位で会ったことはなかったけど、わたしの従姉の子供のことらしい。糸島のマドンナ。小富士山から名前がきている。鄙には稀な美人。ふじこしやんは福岡女専のテニスのチャンピオン、女子大のクイーンでもある。「おおそうか」、それでやっとな話があった。ふじこしやんのおかげで友だちができた。

嘉穂の関係でいえば小鶴誠。小鶴といえはだれも知っている名古屋金鯱軍のホームランバッター、「まこちゃんん、ホームラン打て！一本で千円！」と声がかかる人気者。そのひとがこんなところで二等水兵。飯塚商業出身だった。自分は田川中学出身。「おれは隣の田川郡に五年いた」といつて、仲良くなった。カッターは一六人で漕ぐ。二〇人一班だから余ったものが出る。わたしはだいたいその余った側。「まこちゃん、替わってくれ」、一回か二回替わってもらったことがある。まこちゃんはどういうわけか予備学生を受けなかった。戦後プロ野球で活躍、王さんが出るまでのホームランキング。野球をやめてから飯塚で自動車会社を経営。がんばっているなと思っていたが、軍隊以外では会っていない。数年前に死んだ。

\*小鶴誠は一九二二〜二〇〇三、『和製ティマジオ』、一九五〇年、松竹ロビンスで二冠王、広島カー

ブを最後に一九五八年選挙引退。

「気合いがはいつとらん」とぶんなぐられるばかりの毎日。これでは訓練で死ぬのではないかと思つていた。そしたら海軍予備学生というのがあると聞いた。予備学生を通れば、士官と兵の間の待遇になれる。何が何でも予備学生にならなければと思った。

そのためには適性検査を受ける。まず飛行機の適性を見る。ぐるぐる回つてばつと立つ。(わたしは)それでダメ。飛行機は落第。經理学校は目の悪いものがいった。どこに配置されるか、夜中に発表がある。真つ暗な練兵場。だれだれ砲術学校へ、だれだれ航海学校へ。だれだれどこどこへ、——いつまでたつても名前を呼ばれない。ありゃー万年二等兵か。いつまでもフライパンにジョンペラ服で殴られるのか。呼ばれ続けてだれもいなくなつてから、呼び出しがあつた。

「大原長和二等水兵、防備専修予備学生を命じる。予備学生として海軍機雷学校に配属する」。

われわれの教務班長(陸軍でいう分隊長)は上等兵曹(陸軍の曹長相当)、おとなしい、何にも、ものもいわんというかんじの人、でもしっかりしたひとだった。帰つて報告した。「防備専修予備学生を命じられました」「大原、お前にむいてる。どうみても、攻撃型じゃない。防備専修に、おうとる」といつてくれた。「ありがとうございます。防備専修につとめます」。

大学にも立派な人はいるが、あの班長はもつと立派。みんなから尊敬されていた。しかしまもなく魚雷艇で戦死した。

適性検査の中には音楽の試験もあつた。音には絶対音感と相対音感がある。潜水艦に乗る場合、この絶対音感を認識する力が必要とされていた。海中には電波は通らない。音波だけ。潮流音、水中艦船音、いろいろな音を絶対音感で聞き分ける必要があつた。

音楽が好きだった大原水兵には絶対音感があつた。大原二等水兵は地獄から逃れて、機雷学校へ行くことになった。

軍用列車で機雷学校へ。その列車があつちに停まり、こつちに停まり。ちつとも進まない。有田から先のどつかの小さい駅。あわててうちに電報で連絡、博多駅で家族に会いたい。プラットホームにいた女のの人に頼む。「お願いします」「お願いします」。何百人もいる。ふつうなら二〇〇円ぐらいのところを五〇〇円ぐらい渡して。あの駅前郵便局にこれだけの電報が殺到したのは空前絶後と思えますよ。電報は届いた(それはあとでわかつた)。ノロノロ行つて、やつと鳥栖まで来た。そうしたらノンストップになつちやつた。ぶつとばして博多へ、ホームで徐行、でも博多駅に停まらん列車だった。われわれの汽車だけ停まらない。先にも後にも博多駅に停まらん列車は聞いたことがない。

二つの従軍記(大原長和・松浦長彦・服部英雄)

新宮かどこか小さな駅には停まった。経済の波多野鼎教授。あの人はその駅に家族できていた。波多野教授はあとで農林大臣になる。そういう人はやはりちがうのかなあ。電報が届いたことは届いたと後で知つたけど、ムダだった。小倉は停まったかな。広島、神戸は停まった。博多駅だけノンストップ、あのうらみは一忘れん(笑)。汽車は大船まで行つた。乗り換えて横須賀が最終。浦賀そして久里浜の機雷学校に入った。

機雷学校で何をするのか。機雷、爆雷で潜水艦をやつつけるのが任務。日本は攻撃一本槍。攻撃し、包囲し、殲滅する。じつさいは始めから終わりまで退却、退却。なのに退却のたの字も教えてくれん。

海軍は南方を確保すれば油でも、ゴムでも、鉄鉱石でもどんどんくる。勝てると思つていた。実際は、輸送船、次ぎ次ぎに沈められる。それでこれを護衛できる新造艦を造つた。海防艦である。ブリキでできている、歩けばポコポコ音がすると悪口をいわれた。

海軍の精銳は乗りたがらない。船団護衛では金鶏勲章にはならん。殊勲甲なら待遇も向上、けれど護衛は目的地について当たり前。こくろうさん、また行つてくれ。輸送船団といつしよに潜水艦に沈められてしまふ。予備学生なんて臨時(雇い)だから、海防艦乗り組みでちよつとよい。及川古志郎大將(1883~1959)が海上護衛総隊司令長官になった。連合艦隊司令長官と同格で船団護衛に当たることになった。攻撃と並んで防衛の重要性がやつと認識された。

一九九二年から一九九五年まで予備学生、海兵と同じく、教練三年が二年に短縮された。やつと卒業し無事合格した。なかには不合格で二等兵に落ちるものもある。落ちる人は夜中に「ちよつとこい。もういちど海兵団に戻れ、お前は見込みがない」。訓辞を受ける。「気を落とさず頑張れ」。

一月二五日に海軍少尉に任官した。機雷学校、名前が悪い。すき学校ならいい(嫌い学校じゃなく、好き学校)。アンチサブマリンスクールで対潜学校と改称された。われわれの教官は海兵出身か対潜一期の出身。その中に秋山教官。神戸商大からきた。ものすごくかっこいいけど、なめられちゃいかんつて、かならず殴ること有名。「足開け、メガネはずせ、歯食いしばれ」ときたらもうダメだ。ほつぺたに火花が散る。

よく「泣いて馬鹿を斬る」といった。心を鬼にして殴る。それが口癖で、ナバキ(ないてばしょくをきる)といつていた。こちらは「泣き虫で、バカで、キチガイ」のつもりだった。戦後ナバキが亡くなつて、なぐられた関西の同期連中で海軍葬をした(だから心底憎まれていたわけではない)。

教官の一人に糸園さん。東大経済を出て日銀に勤めていた温厚な人。あまり、なぐら

ない。戦後、中津で家業の呉服屋を始めたが優秀な人。八幡大学で非常勤、あとで西南学院大学が呼んだ。「中小企業論」の教授になった。

戦後、対潜学校の同期会にてきて、「おまえたちをなぐつてすまん、すまん」といった。

海軍は「早めし・早くそ・早しよんべん」という。それがわたしはまったくだめ。ゆっくりトイレ。プライベートな空間を楽しむ。表に戦闘帽を掛けて入る。だれが使っているかわかる。「なかは大原、こりやだめだ」。私が入るとその前にはだれも並ばない。

ある時、砲術学校に行くことになった。何時何分集合。ご飯を食べればトイレに行きたくなる。時間がない（五分前集合にかかった）。トイレを我慢して整列。上陸用舟艇に乗って横須賀へ。砲術学校の階段教室で講義が始まる。全然頭に入らん。早く休憩にならないか。やっと休憩、ところが砲術学校は知らないところ、どこにトイレがあるかわからない。練兵場のはるか彼方に発見。必死でたどりつく。やれやれ。戻ったらドアが閉まって次の授業が始まっている。意を決してガラツと開ける。みなが見る。敬礼して中に入った。

帰校後、総員集合。「砲術学校において我が校の名譽を汚したものがおる」。全体責任。全員殴られ、とくに私は念入りに殴られた。しかしわたしの犠牲によって、以後外出の際は必ず用足し時間が設けられることになりました。

トイレ問題はまだまだ続く。B 29の大空襲が始まった。灯火管制。夜は真っ暗、便所は板で四角に切つてあるだけ。海軍は特に便所はきれいにする。船を汚してはいけない。しかし暗くて見えないから汚しているかわからない。手で触ってみて、よかろうと思つて帰った。

翌日、夜中の一二時に総員集合。講堂に集まった。教員がずらり。全員木刀や海軍精神注入棒を持つて控えている。いつもマスクをしている教官がいた。マスクを取ると鼻が上を向いて、威厳がない。いつもマスク。口をパクパクさせながら「夕べの夜中、便所を汚したものがおる、名乗り出よ」。

一座はシーンとしている。ひよつとしたら俺かもしれん。しばらく考えた。誰かが名乗りでなきや解散にならん。仕方がない。意を決した。皆をかき分け前に出て、マスクの教官と対峙。

「確信は持てませんが、夜中に私は行つております。わたくしかも知れません」。

五分か一〇分、にらみ合いが続いた。

「よし、わかった、解散する」

何ごともなく済んだ。翌朝病室に診断を受けに戦友と二人で出かけてみた。ナバキ教

官に出くわした。「待て」ときた。昨晚欲求不満だったろうから、ここで思いっきり殴られると覚悟した。そうしたらナバキは「ナンだそのざまは」と戦友の方をバカバカ殴つた。隣のわたしには一顧もしなかった。それからじぶんは殴られなくなった。ナバキが殴らんのだから、他の教官が殴るわけはない。対潜学校卒業まで殴られない。卒業したら少尉任官だから終戦まで殴られずすんだ。

教官のなかに松平さん、会津の松平家の一統とか、学習院から東大文学部のおぼっちゃん。どうみても軍人には不向き。われわれの担任なのに他の教官が殴っているとき、すーっといなくなる（そういうひとと海軍にはいた）。戦後天皇侍従になった。

文官としては佐藤吉五郎、大阪府視学から少佐待遇で海軍にきた。海軍対潜学校には科目に音楽がある。リズム訓練である。佐藤教官はピアノの先生。リズム訓練は「お馬の親子」、「お馬の母さん、やさしい母さん」毎回唱う。佐藤教官作詞作曲の「水中艦船音の歌」も歌つた。「ピストンは——」という歌だったかな。こちらは音感のいいものばかり、音痴はいないし、ナバキが入ってくることもない。ここは楽しかった。世界の音楽鑑賞がリズム訓練でできた。歌は外国のものはダメとなっていた。ドイツ・イタリーもダメ。イギリス民謡は日本語化のもの（日本の歌詞になっているもの）もダメ。でもピアノで弾いていかんという規則はない。ただドミソ・ドファラはハホト・ハヘイといった。

家に手紙を書くとき、検閲がある。詳しくは書けない。趣味が役立つと書いた。家ではわたしが復員するまで、その意味がわからなかつたらしい。

一九九冬、一二月二五日卒業。卒業して「舞鶴防備隊に行け」と命ぜられた。舞鶴では掃海艇「鷲崎」に乗艦した。「航海長、通信長、兼水測指揮官兼分隊士」の辞令を受けた。航海に出てみると冬の日本海は毎日大吹雪。お釜がひっくりかえつてご飯が炊けず、乾パンですます有様だった。

ひと航海して帰港したら辞令が出ていて、潜水学校へ転属。わたくしは対潜学校が専門ですが。潜水艦をやつつけるはずが、その潜水艦乗りに。対潜学校出身者が潜水学校とはどういうことか。ただ事ではない。さては特攻隊だなど覚悟を決めた。

大竹潜水学校で、潜水艦の基本を学んだ後、倉橋島の大浦基地に配属された。そこは特殊潜航艇の製造、訓練基地。特殊潜航艇は秘密を守るため、「甲標的」と呼ばれていた。以後終戦まで甲標的艇長訓練を受けたわけである。「甲標的」は開戦当初のハワイ真珠湾から、シドニー、ディアスフレゴ等に出撃した。帰還者はほとんどなく、人間魚雷「回天」とはちがうが、実質的には特攻隊であった。命がけの訓練が続いたが、敵のオリンピック作戦（南九州上陸作戦）が発動すれば、ただちに出撃する準備を整えていた。

二〇年七月、瀬戸内海の夏は「瀬戸の夕凪」、暑い。ものすごく暑い日が続いて、呉の食糧倉庫・氷冷蔵庫がダメになった。中のもが腐って、みなに配る。バターも半分溶けた。もったいないから食えと配給になった。ペロペロッと一ポンドなめた。ひまし油一本と同じ効果。トイレからみな出てこない。私は特にいつまでもおさまらない。疑似赤痢で呉海軍病院に入院した。何も食わずに数日寝れば直る。二四日、退院したが、腹ぺこぺこ。呉の棧橋に向かったが、空襲警報発令中で誰もいない。やっと倉橋島行きの船が出た。乗員二〇〇〇人のうち士官は一人。「下士官ちよつとこい、空襲警報がでている。見張りを立てろ」、前と後ろに見張りを立てた。すぐに「前方より敵機来襲！」約五〇〇機の戦爆連合の大編隊、英米連合軍、空母二〇隻の機動部隊が呉めがけて来襲してきた。「全員船室に入れ」と命令、わたしはブリッジに飛び上がった状況を観察した。当時呉軍港内には空母二隻（天城、葛城）、戦艦三隻（榛名、伊勢、日向）、重巡二隻（利根、青葉）、軽巡一隻（大淀）等がいた。

一斉攻撃が始まった。日本艦隊めがけて爆弾、魚雷、機関銃で攻撃。真珠湾の逆。まわり一面水柱に覆われ、船はミリミリ音を立てる。おれ戦死するのかな、と思った。軍艦も油がない。軍港防備用の砲台（浮き砲台）になっていて、回避運動もままならぬ状態になっていた。日向という戦艦、島影を草や木で甲板を偽装。敵の伝単（宣伝ビラ）が撒かれる。「日向さん、松が一本枯れましたよ、植え替えた方がいいですよ」、カモフラージュも無駄と分かり高射砲を撃ち出した。駆逐艦も撃っている。約一時間の戦闘で日本の軍艦は一隻残らずやられた。

自分の船では船長に指示して「あっちに行け」「こっちに行け」と逃げ回るしかなかった。わが船は奇跡的に犠牲者が一人も出ずにすんだ。それだけは何よりだった。やれやれよう当たらんかったなあ。飯くってない。腹が減っては戦は出来ぬ。ひっくり返って寝ていた。若い乗組員が、これで日本は勝つんかなあといった。わたしの目の前で、連合艦隊は滅びた。大日本帝国海軍の最期を見届けた。本当は大編隊より、一機の方がこわい（原爆）。

二〇年八月六日、わたしは沈座艇長を勤めていた。敵の攻撃があると陸上は防空壕に逃げる。船は逃げようがない。潜水艦だけは潜って隠れることができる。大きな潜水艦なら潜って隠れるまで時間もかかる。小さければ、水さえ入れれば、ずくつと沈む。その沈座艇長を勤めていた。

飯は陸上から支給。朝飯すませて一服。警戒警報は出ていたが、一休みしていた。突然当たりがぱつと明るくなった。瞬間アメリカのバカが朝なのに照明弾を落としかかと思つた。数秒して、ドーン、海の向こうの広島島の辺り、ダダダーつともすごい爆音が

鳴り響いた。

まず、ま横に煙りが散った。それからグーッと集約して、上にワーツと上がった。わたし一人があぜんとして見ていた。呉の火薬庫の爆発かと思つた。あの人類最初の原爆投下、キノコ雲を、特等席で見たことになる。その日のうちに一〇万人が死んだと、うわさがとんだ。

呉鎮守府からは直ちに応援救助に。「お前たちは特攻隊、敵に備えて待機せよ」。広島市の市街には行かずにすんだ。特攻隊だから助かった。でも放射能を浴びたことはまちがいない。経済の小島さんは原爆手帳を持っている。

わたしは横須賀で最後の機動部隊の出撃も手を振って見送っている。大和、武蔵に次ぐ三番艦、信濃という戦艦を空母に改造した。六万何千トン、一九年一月やつとできた。横須賀から松山沖に回漕する。空母天城、葛城と最後の機動部隊を編成すべく横須賀を出航した。館山沖に行く機動部隊を「がんばれ」といつて見送った。遠州灘沖で潜水艦に撃沈された。たつた数時間で沈められてしまった。

数時間しか航海できなかつた最大空母信濃、呉空襲での連合艦隊の撃沈、広島原爆と大日本帝国の崩壊をつぎつぎに目撃した。

八月一五日、終戦になった。われわれは特攻隊、まだ負けとらん。最後まで戦おう、というものも相当した。血判書が回ってきた。連合艦隊第六艦隊第一特攻隊・大浦突撃隊。名前だけは怖いぐらい。艦隊司令長官は侍従武官だった醍醐忠重中将（のちに戦犯として処刑された）。佐伯から戦隊（第一特攻隊）司令（大佐）が水上飛行機で飛んできて、説得にあつた。「おまえらは今日付で戦死だ！」ようやく事態が沈静化した。

敗戦になって漁船が集まった。油はもういらんだろう。漁船は油なくては困る。余つたものは何でも下さい。敗戦とはこういうものかと思つた。

八月二四日、「臨時雇い（学徒兵）」は帰ってもいいぞ。本職は残れ」と命令が出た。

九州方面は大分まで船で送つてやる。門司は機雷があつて危ない。事実神戸に向かつた船は機雷事故にあつた。無事大分港に到着、港からは西大分駅に近い。

荷物をひっかついて行ける距離。けれど私物が多かった。士官になると（給与は高くなるが）備品は配給ではなく私費で購入する。夏冬の軍服もオーバーも私物、日本刀はスチール製だけと私物、武士の魂だし、捨てるわけにはいかない。こうり（柳行李）を担いで二〇メートル、また戻つて日本刀とトランクを運ぶ。自転車のおじさんが後に荷物を積んで駅に運んでくれた。子供が満州に行つていてまだ帰つてこないという話をした。

ありがたかった。それ以後、私は大分の方（その親切な恩人）には足を向けて寝られん。小倉乗り換えて博多へ。博多に着いたのは真夜中で、真っ暗。また尺とり虫で行こうとしたら、鎮海の海軍航空隊が博多駅にいた。明朝までこれを預かってくれ。行李を預けた。駅を出るとあたりは焼けて何一つない。渡辺通まで来た。水道が破れて水が出っぱなし。家がなかつたらどうするか。家は古小島、いま双葉女子学園のあたり、そこも丸焼けだった。海兵団にいっしょに入団した中央大学の友人の家では、お母さんが焼死した。でもわが家は奇跡的に残っていた。

真夜中、塀を乗り越えてトントンと戸を叩いた。父と母が起きてきた。そりゃ喜んでですよ。（福山航空隊にいた）弟は、と聞くと「もう帰つとるよ、いまぐうぐう寝とる」。占領軍に引き渡す飛行機のリストが作られたあと、一機が帰還した。員数外であった。お前にそれをやる。飛行機をもらった。

弟、福山から別府、そこで友人を降ろして門司上空から博多灣へ。飛行機で飛び上がったはいけど、メータは動かかん、方向も燃料の残りもわからん。うちは焼けとらん。そこを確認してから香椎の渡辺飛行機工場のとこに降りた。それからただいま。帰宅して

いた。弟が別府に着水したころ、わたしは西大分にいた。知っていたら途中から乗せてもらいたいところだった。軍隊に行った子供が二人帰ってきた、家族も大喜びだった。荷物は翌朝自転車で行った。シャバの服に着替えているから士官とわからない。「きのう預けた大原少尉だ」。荷物を受け取った。こうしてわたしの戦争は終わった。

——軍歌はどんなときに歌いますか

「さらばラバウル」とかは軍国歌謡、軍歌ではない。ラバウルでは歌わない。古閑裕而が作った国民歌（古閑裕而には露宮の歌「勝つてくるぞと勇ましく」、暁に祈る「あゝあの顔であの声で」など）。有名な「貴様と俺とは同期の桜」は予科練の歌、「同じ航空隊の」を「同じ兵学校の」とか「同じ対潜校の」とか変える。「同期の桜」は宴会では歌わない。レクイエムだから当事者である我々には歌えない。同期戦死者の慰霊祭だけに歌う。対潜学校同期会を京都仁和寺でした。朝、慰霊祭。同期に本職の坊主もいる。かれがお経。あとでみんで肩くんで「同期の桜」、その時しか歌わない。「海ゆかば」も歌わない。

本物の軍歌は軍歌演習で歌う歌。円を周り、行進しながら、軍歌帳を掲げて歌う。世間の人が知らんような歌。たとえば「艦船勤務」「四面海なる帝国を、守る海軍軍人は」とか。

——対潜学校・音楽教育の効果はあったのですか

わたしの知る限り、残念ながら、実際はそんなには役立っていない。「クイッククイックグーグー」となるのは潜水艦」と習ったが、これは日本の潜水艦。アメリカの潜水艦は音がしない。米国では電気冷蔵庫が開発されてサーモスタットの音を消す装置が開発された。それを米海軍が買い上げた。

フランス・ビスケー湾に入った日本の潜水艦は三日も四日も前からドイツ側にはわかってた。こんなやかましい艦で、よくぶじにこれたものだといわれた。けどアメリカの場合はそうはいかなかった。

不利な条件ばかりだったが、それでも我々「対潜学校四期予備学生」がいかに奮闘したかはぜひとも書き残してほしい。その例として連合艦隊の「菊水」一号作戦、戦艦大和以下、一〇隻の海上特攻部隊による沖繩米軍泊地突入作戦を挙げたい。対潜学校の同期生八人が戦艦「大和」、軽巡「矢矧」、駆逐艦八隻に水測士として乗っていた。東大法学部の浅羽満男君は戦艦「大和」乗組、我々のトップ、一高東大の丸山昂（こう）君は、戦艦ではなく海防艦に乗った。名前が「宇久」。名前がいい。「浮く」から沈まん。

この人はのちに内務省から警察、防衛事務次官になって、シーレン防衛の大家になった。浅羽は戦艦大和の最後を知る人物。水測士で大和に乗って、聴音器やソナーを船底で測る。それが任務だったが、護衛にいる周りの味方の船の雑音ばかり。仕事にならな。上にあがってブリッジの航海長の補佐をしる、となった。船底で作業が続いていた部下は全滅、ブリッジにいた多くのものは助かった。三〇〇〇人中、二〇〇〇人だけ助かった。橋本昌太少尉（慶応法学部出身）は、「矢矧」と運命を共にした。「大和」護衛の中心は「冬月」、「涼月」という防空駆逐艦。「冬月」に一橋大の土橋久男、「涼月」に専修大の森田賢治が乗艦。「冬月」の土橋は浅羽らを救い上げて佐世保に帰還。「涼月」は行方不明。「涼月」はロケット砲弾が船首に命中して大破。大火事になった。森田は砲弾火薬庫に消火ホースを持って飛び込んだ。戦死者の遺体がぶら下がって進めない。軍刀で肉片を切って進んで消火、爆発を食い止めた。

しかし船首が大破して艦が前に行かない。どうしたかというとバックで帰った。艦長が後進命令。そろそろと行くしかない。日が暮れた。こうなると、こわいのが敵潜水艦。停まっているのと同じ。「森田頼むぞ」といわれ、水測士は水中聴音器を必死で聞く。聞こえてきた。「右何度、感度一」、つまり一番小さい音、だんだん「感度二」、「感度三」。「砲戦準備、爆雷戦準備！」「感度四」、「感度五」、「一斉灯火！探照灯、照らせ！」明るく照らし出されたのは日本の漁船だった。やがて夜が明け、島が見えた、水兵の一人、「あれは五島です。わたくしはあそこの出身ですから間違いないありません」。

一隻漁船が釣りをしていた。手旗信号を送ってきた。「護衛する、われに続け」、そう

してかろうじて佐世保に着いた。岸壁に着くや着かぬかでブクブク沈み始めた。あわてみんなどで助けて沈没は免れた。その日のうちに、尻から帰った「涼月」を知らない佐世保の人はいなくなった。でもその後「冬月」、「涼月」の二隻は関門海峡の防空砲台になった(伊勢日向と同じく燃料不足により、停泊)。そして終戦後は若松港の堤防になった。二隻ならべてコンクリートで沈められた。帝国海軍の最後である。



## 陸軍兵長 松浦長彦従軍記（遺稿集「長」より）

慣例にしたがって氏神青幡神社で部落の人が武運長久を祈願してくれた。それから村の小学校で壮行会があった。私の他に千綿という警察官の人が同時に召集され、わたしに挨拶せよとのことで「私は至誠をもって従軍いたします」とだけ言った。それから駅まで村の人が送って呉れた。汽車の窓ぎわには、母と家内と親類の人がおった。母は涙もろいので涙を出していた。わたしは出発のときにつこり笑ったそうだ。汽車には父と一緒に乗ってくれた。

集合地は広島であった。集合時間は昭和十五年三月六日午後二時であった。まだ時間があるというので、父とデパートで昼食を食っていると、近くにいた人が、「あなた達は今日集合することになっているのではないですか、それならもう集合してきますよ」と教えてくれた。それで食事を中止して、直ぐに集合地に行った。その時私は、軍隊とは変なことをする。二時集合と達してあつたら、二時に集合を始めればよいではないかと思つた。

部隊は独立山砲兵第五連隊であつた。宿舎は広島市の宿屋で、同じ郡出身者が一緒に宿泊することになった。

私達の係に下士官が一人来た。被服はもらったが兵器はもらわなかつた。丸腰の二等兵になって、第一に教えられたことは、敬礼のしかたであつた。当時、日本の軍隊は敬礼を非常に重視していた。

若干の人は広島市の遊郭に遊びにいった人もあつた。二、三日するうちに、私達は満州にゆくのではなく、中支の第一線であることがわかつた。私は却つてその方がよかつた。満州の正規兵營に入つてくだらない訓練をうけるのは、たえがたいと思つた。それにくらぶれば第一線はなんといつても自由があると思つた。

あるとき私達新兵と下士官と一緒に、蜜柑をくいながら雑談したことがあつた。私は「支那にいったら揚子江で魚を釣ろかな」といつた。新兵達はどつと笑つたが、下士官は変な顔をした。出発は宇品港からであつた。

波止場で女学生達がさかんに旗を振つて送つてくれた。輸送船は病院船であつた。乗船前第一中隊に属することにきめられていた。船はよい船であつた。関門を過ぎるころ、すれ違う船から、盛んに旗をふつてゐるのが見えた。途中すこし荒れた。

ある夜演芸会が催された。兵隊はうまい人がいなかった。演芸会が終わつた後、指揮の将校が「今日の演芸会を見てみると、思想の疑われるようなのがいる」といつた。私は別にそういう人はいないと思つた。

船の甲板で兵隊が、どこかの部隊の将校に敬礼しなかつたといふのでひどく叱られた。そうである。

上海の飯田棧橋に船は着いた。そこで私達は、皆上陸して、引率されて歩いた。戦火にやられた破壊の跡だけであつた。市政府だけが無傷で残つていた。綺麗な洋装の女が、その建物から出て来た。支那の子供が私達と行きちがいなながら「兵隊さんキャラメル進上」といつた。

又私達は乗船して、揚子江を遡行し、南京についた。南京あたりの河幅の広いのに驚いた。間もなく四千トン位の温州丸という船にのつた。私達は、長崎、佐賀、石川、岐阜、福井の諸地方の出身の兵隊であつた。

温州丸は正式の輸送船で、兵をぎゅうぎゅういう程詰めこんでいた。田近栄信という北陸出身がいた。私はそそっかしくて、飯粒をよくこぼした。それでいつも田近に文句をいわれた。

揚子江は、当時上流から機雷が流れて来たらしい。途中で油送船が沈んで、マストだけ出ているのが見られた。副食は缶詰であつた。船員が内職に菓子等を売つていた。

船は武昌に着いた。武昌でダンベイ船に乗替えた。兵隊が乗替のとき、中隊の指揮官、下川準尉の思うように動かなかつたので、下川準尉が「貴様等言うことを聞かぬと、ブツタ斬るぞ」といつた。

ダンベイ船は間もなく日本軍が牧場港と称していた船着場に着いた。武昌から六里位下流の地である。

船を出ると一中隊の古い兵隊が迎えに来ていた。牧場港から中隊宿营地葛店鎮（葛）に向かう途中桃の花が咲いていた。中隊にいったら新兵教育の第四班に入った。班長は河内軍曹で、班付上等兵は上原上等兵であつた。入隊最初の夜は、自分の名前と隊名を書いた布切れを、上着につけることであつた。私はうまくそれが出来ず、他の人より遅く寝た。

朝起きると、馬の手入れに出された。食事は甚だ粗末であつた。朝は味噌汁に野菜、昼は水牛の肉、夜は汁と野菜であつた。

古い兵は、それぞれ適当に料理を作つて、食つていたが新兵にはそれが出来ず、非常に腹が減つた。馬の様にたくさん食ふことが出来たらなあというのが、偽らざる兵隊の気持であつた。

新兵として、馬の扱い方と兵器の使い方が実科として、たたきこまれた。

学科としては軍人に賜りたる勅諭を暗唱することであつた。馬の扱い方では脚の手入れがやつかひであつた。しかし私は馬の扱い方にはなれた。急ぐとき等は馬糞は手でつかんで片づけた。銃剣の手入れが、やかましく言われ甚だうるさかつた。

勅諭は五島出身の松竹兵一（これは五ッ海という東京相撲の実兄）と愛場全藏の二人がおぼえきらぬので、よく対抗ビンタをさせられた。

\*編者注、対抗ビンタは相互が平手打ちをする

間もなく部隊は、宜昌作戦に出発することになった。私達の班長も上等兵も出発せねばならなかった。出発する前夜、河内班長は酒を呑んで、士官志願の兵をよび、前線で略奪をやることや、強姦をする話をしてもらった。

私達一般新兵はうるさい下士官や、古兵がいなくなるので非常に嬉しかった。後にこのことは、準尉一、下士官二、三名、他に戦争に加わる能力を殆ど失っている古兵が若干名であった。残留した古兵及び新兵は、連隊本部の村上大尉の指揮下に、葛店地区の警備につくことになった。それで当然私達は歩哨、動哨、うまや当番の勤務につかねばならなかった。私はそれまで肉体労働を殆どやったことがなかったので、一番つらかったのはクリークの水を風呂に汲みこむ仕事であった。しかしとにかくなんとか仕事もかたづけられた。

中支一体には水の中に細菌が居るらしかった。兵の飲用水はクリークの水を濾過しただけであったので、多くの兵が腹を悪くした。粘液便がしばしば出るようになり、ひどい人は入院した。私もその病気にやられ、体が疲れたが、頑張っているうちに、なれたのか常態にかえった。

兵の喜んだ勤務は、牧場港の衛兵、葛店の街の衛兵であった。牧場港の場合は、同港に揚げられる品物のうわ前をはねたり、民家から食糧を取って来たりして、ご馳走が食えるからであった。葛店では、ピー屋の主人が衛兵に汁粉を一杯づつ御馳走した。しかし一番良い勤務は、武昌行きトラックに警乗兵として乗ることであった。武昌の街にはいろいろなものがあった。中隊下士官は自分のところに品物をもつて来た兵隊に武昌行きを命じた。私は元来融通のきかぬたちで、そんな要領のよいことは出来なかったの

で、一度も武昌には行けなかった。

\*ピー屋は軍隊の陰語で慰安所。

中隊に残留していた馬も戦鬪の落伍者であった。しかし新米にはその馬を一生懸命手入れすることが命ぜられた。私の受け持ちの馬は、青毛のよい馬であったが、腰なえで残留したのであった。良く手入れしていくうちに、青毛が光澤をもつようになり、すっかり元気になった。後に中隊全部の馬の中でも指折りの良馬となって、中支の戦で前脚馬として働き、フィリップに渡った。フィリップの戦場で又腰なえとなって、放逐されてしまった。

\*砲兵隊の馬には前脚馬、輪馬、砲架馬、砲身馬、後脚馬、段列馬の役割分担があった。

二つの従軍記（大原長和・松浦長彦・服部英雄）

## 初めての戦

当時の日本軍は非常に広大な地域に進んでいたが、それは点と線の占拠にすぎなかった。それで各地で遊撃隊が出没した。葛店から南東数里の地点に湖水沿いの部落があり、そこに時々ゲリラが来ていた。初夏の夜十二時私達は出発した。そして未明にその部落を全部調べたが、怪しいものは何も見つけなかった。小雨が降りだした。それですっかり警戒を解いて、民家の小屋に入って火を起し朝食をとった。そして一休みし帰る用意をしていた。

ところが突然パンパンと音がして、小屋の前にかけてあった物が落ちた。私は「また松下二等兵みたいなおんびりした兵が発砲したな」と思った。ところがそれはゲリラが襲撃してきたのであった。小屋の前二十間くらい離れた土堤のところに、ゲリラが銃をかまえてポンポン撃っていた。私達も大あわてで銃をとって応戦した。私達は軽機を一ちよう持つて来ていた。立石二等兵は非常に沈着な兵であった。軽機をかまえて撃ち始めた。そうするとゲリラは逃げ始めた。若しゲリラがもっと接近して手榴弾を投げ、銃剣突撃したなら、私達はさんざんな目にあっていたらう。逃げ足だったゲリラはどんどん逃げ林の中に姿を没した。ゲリラの遺棄死体五であった。私達は何の害もなかった。私の三八式歩兵銃は、三発うったらもう使えなくなっていた。この戦闘ですっかり興奮して、疲れを忘れて帰隊した。

戦闘に行かないで、私達と葛店に残留していた古兵たちは、行軍するとすぐへこたれる古兵が多かった。皆炊事場で炊事するのが仕事で、おんびり日を送っていた。新兵をからかったり、いじめたりしていた。もし新兵が彼等の意に反すると、ひどいリンチを加えた。私のところには自宅からよく慰問品が来ていたが、私の手に渡らないうちに、彼らに奪われたこともあった。

中隊の主力は宜昌付近で戦闘をした。魯堰鎮というところで、優勢な敵の攻撃を受けた。指揮小隊長熊井猛中尉は大胆な猛将であったが、大きな姿で畑を歩いているとき狙撃されて戦死した。又我等の班長であった、河内軍曹は分隊長として、砲を指揮していたとき、直撃弾を受け他の三人の兵と共に戦死した。中隊主力は戦闘を終わって、乾溪場というところにおちついた。そこで中隊から新兵教育係の右田少尉が、下士官をつれて、私達のところに来た。

私は観測教育を受けることになった。当時葛店鎮で連隊本部も、大隊本部も大きな豪家を占拠していた。観測教育が連隊本部で、通信教育が大隊本部で行われた。私は連隊本部に行かねばならなかった。

観測は砲兵の中で最も頭を要するものであった。私はうまく行った。最終の試験のときは第二位であった。中隊から同行した宮原軍曹は、それを非常に喜んでくれた。各隊からより集まった教育隊なので非常にひどいリンチが行われた。しかし私達の班は連隊本部の本多伍長という老練な人が班長であったため、あまりリンチは受けなかった。

観測教育を受けているとき、白虎山という中国軍の要塞にのぼった。ここは武漢の入口を押さえる要地で、コンクリートでかためてあった。此の要塞を中心に、處々にトーチカが出来て、日本軍の進攻をくいとめるようになっていた。

教育が終わると私達はまた中隊に帰った。そして一等兵に進級した。もう秋風が吹いていた。私達は直ぐに出発して中隊の主力に追及することになった。

漢口、孝感、応城、十里舖、沙洋鎮等の湖北の地を通った。沙洋鎮の前で宿営したときであった。私は厩番について、桂一等兵と共に二十隻出し、南京豆を住民から、パケツ一杯買った。二人でそれを夜通し食った。そして翌日は腹をこわし行軍の途中ししば戦列を離れ、大便しなければならなかった。後桂は甲種幹部候補生の試験に合格し、東京で勉強中自殺した。美青年であった。自殺の理由不明。

当陽を過ぎ遂に中隊に到着した。

乾溪場は戦後日まだ浅く、戦火に家は焼かれ住民は逃げて居なかった。

中隊宿舎のすぐ側の高地に、山砲を一門あげ敵にそなえた。その砲の所から砲隊鏡で見ると、樹木の茂った山ばかりであった。支那もこの辺まで来ると山には樹が茂っている。それまでの山は禿山ばかりであった。

\*砲隊鏡Ⅱ二本の角型眼鏡筒をもつ双眼鏡式大型望遠鏡。重砲兵が用いる。

敵前百五〇米位のところに補助観測所があった。そこには観測下士官と兵二名が出ていたが、時々敵が来て果物を持って話しかけたそうだ。中隊長池知中尉は連隊本部指揮班長になり、栗原中尉が中隊長になった。私達の隊の属する兵団の長堤少将が第一線を視察に来た。それから間もなく、中隊は漢水作戦に出発することになった。

## 漢水作戦

いよいよ交戦地域に向かって進む。もう道は山道である。雨で湿った道で分解した砲を積んだ馬がひっくりかえったりする。そうすると「前にてい伝、第二分隊後脚馬故障」と連絡が来る。最前方を進んでいる中隊長は、「後にてい伝、二分隊残つて処置せよ」という風にして進む。そのうち故障がなくなり、隊に到着すると「第二分隊後脚馬到着」と

いう風な、てい伝が来る。そのうち夜間になった。隊は進みながら常にてい伝が来る。「後にてい伝、右の方に溝がある」とか「後尾異常ないか」というようになってい伝だ。こうして進むうちに前方で銃声が聞こえるようになった。

前方を進んでいる歩兵が、敵と遭遇したらしい。後を進んでいるものには、これは有難いのだ。もう部隊が進まないで、歩かなくてもよい。

夜明けに我々の隊は放列をしくことになった。進んでいるうちに小銃弾が、ピューと頭のうえを通った。戦になれないので一寸怖ろしかった。放列のわきで観測した敵の歩哨が遠くの稜線上に一人いるのみで、他は何もなかった。中隊長は敵もなにもいない家に向かって発砲させた。そして戦闘日誌には、有効な射撃を行った、と書かせた。

\*放列・砲列Ⅱ射撃できるように砲手、大砲を横に並べた隊形。

結局漢水作戦では何等戦らしいものではなくて我々は引き返すことになった。

もう相当秋も深くなった。湖北の野を行軍又行軍の日が続いた。中支を歩いて感ずることは、支那の景色が日本の景色にくらぶれば、平凡であるということであった。

栗原中尉は兵を使うことをなんとも思っていないかった。行軍で疲れている兵を使って溜池の水を落として魚をとれと命じた。私もその使役についたが、水が多くてどうにもならなかった。結局スツボン一匹にドブ貝が少々とれただけであった。それは中隊長が食った。漢水作戦の返りは、牛をつれて帰った。中隊で二十頭もあったと思う。百姓がおいて逃げたのをつれていくのだ。私もその牛追に使われた。牛が将校等の馬の速さにおくれないように、私達は棒で牛の尻をピシピシたいて進んだ。牛の尻の皮が破れて牛が憐れであった。しかし仕方なかった。行軍の途中、牛を殺して中隊長に食わすことが時々あった。そのときは殺役は大石一等兵という「ばくち」上がりの兵で私はその使役に行かせられた。そして牛の肉をもって指揮小隊に帰って来た。牛の肉は殺したばかりの肉はあまりうまくなかった。

中隊長が又代わった。栗原中尉は除隊になり右田少尉が中尉になり中隊長になって、彼は間もなく、東京の砲兵学校に移った。代理として古参の少尉が来た。姓は忘れた。中隊は当陽を經、水匠店、鴉雀嶺を通り紫金嶺に着いた。ここに永く滞在することとなった。

紫金嶺は周囲を低い山にかこまれた盆地のような地であった。北陸編成の歩兵が一ヶ連隊それに山砲一大隊本部大隊段列と私達の山砲が二ヶ中隊いた。

\*段列Ⅱ炊事分隊

私達のの中隊は各民家を占領して住まいとした。中国の百姓こそ迷惑であったと思う。私の属する指揮小隊は中隊機関（本部）後の小高いところを占めた。その家には、妊

娠中の豚がいたが、兵隊の腹中に入ってしまった。又各家には支那の百姓がたくわえていた芋があったが、これも兵隊の食糧になった。滞在間の兵隊の仕事は、宿舍の整備、道路作り、厩作り、粮秣のちよう発であった。当時日本軍は、支那の塩をおさえてしまっていた。生活必需品である塩をおさえられた支那の一般民は、その塩を得るために、米等を持ってきて、塩と交換していた。

私達の宿舍の裏は松山であったが、兵隊はその松を全部切り倒し、燃料にしてしまった。又特筆すべきことは、日本軍においては困難な日常の仕事は、新しい兵隊に全部強制された。私達新兵は消灯ラッパが九時鳴ったが、それから十二時まで位、古兵の襦袢を洗ったり、靴の手入れ、銃剣の手入れをするよう、鉄拳をもっておしつけられた。

日本の軍隊に必死になって守らされた絶対服従ということから出た愚劣なる蛮行であった。しかし私は紫金嶺では肥った。食糧が豊富であったためだろう。

十六年正月には紫金嶺の畑中で、拝賀式が行われた。正月の餅米洗いの使役に出たが、そんなことはしたことがなかったので、まづくて皆に笑われた。

### 宜西突破作戦

宜西は要地であった。揚子江は宜西までが平地の河であり、その上流は山地を流れる。そしてその上流には、蒋介石のいた重慶があった。そこで宜昌付近には蔣軍の精銳がいた。私達はそれに向かって攻撃することとなった。私達の滞在地から、宜昌まで二日の行程であった。宜昌郊外に一泊して宜昌の町に入った。宜昌での宿営は、旧宜昌刑務所であった。この刑務所には、かつて日本兵も相当捕えられていたが、殊数つなぎにされて、上流につれていかれたという話をきいた。

宜昌の対岸に渡ることになった。川幅は半里位かと思う。馬も暴れないで、無事に対岸に渡った。宜昌対岸につき立った山があった。かつて宜昌の戦闘があったとき、支那兵が機関銃をもって、その山頂にこもり、さんざん日本軍を悩ましたという話をきいた。宜昌対岸より二里位奥地に、友軍の第一線があった。そこまで達するため、日本軍の一ヶ大隊が全滅したという話をきいた。

けわしくつき立った五十米位の山があった。それが第一線であった。山砲もその山頂にあげ私達観測手もそこにのぼった。私はそのとき四番観測手で測遠機の係であった。早朝砲撃開始した。敵は一門山砲を有しているらしく頂上を砲弾が飛んでいった。しかしここでは抵抗を受けることなく私達は前進することとなった。

第一線を守備していた歩兵の話では、この地では蔣軍の日本軍に対する働きかけが相

当あり、スピーカーで日本語で話しかけたそうである。移動するときは、非常にけわしい道を通ったので、馬が下に落ちて死ぬのがあった。山砲を分解して一列縦隊になって細道を進んでいるとき、六、七百米離れた高地から機銃をうって来たが、一問位はなれたところに落下し、友軍には損害はなかった。ところどころに反戦ビラの日本語で書いたのが落ちていた。けれども日本軍には影響がなかったそうであった。

山砲は歩兵と共に第一線で戦うことがおおい。私達も敵前百米にも足りない距離の壕に入らなければならなかった。その時は盛んに友軍の飛行機が爆弾を落とすので砂を頭からかぶった。それから友軍の撃つ赤弾（催涙ガス弾）のために防毒面をかぶって、眼鏡をのそかねばならなかった。砲は零距離射撃をするので、本職の距離測量の仕事はやらずに、砲隊鏡で射弾観測をやった。その戦闘に現れていた日本軍の歩兵は、当時としては最も優秀な装備の兵であった。

\*零距離射撃は仰角0度、砲身を水平にして射撃すること。

小銃を持っている歩兵の他に、速射砲とか、機関銃、大隊砲、連隊砲も持っている兵が多かった。従って歩兵であったが、馬も沢山つれていた。兵器は日本軍の方が比較にならぬ程優勢であった。支那軍の主兵器は機関銃と小銃でたまに迫撃砲が来るくらいであった。ただ機関銃だけは、支那側が欧米性のすぐれたものを持っていた。日本の重機はドツドツと重い音をたててスムーズにはいかなかった。ところが支那の方は種々の機関銃を持っていたが皆軽い音であった。「タンタン」「コトコト」「パッパッ」という音であった。非常に多くの小銃と機関銃を支那側も持っているらしかった。

支那軍の士気はきわめて旺盛であった。七百米位離れた陣地の敵を砲撃すると、その位の距離では測量もよく出来るし、弾もよくあたった。しかし弾の煙が去って見ると、依然として支那軍の機銃が射撃をしていた。しかし機銃と小銃だけの敵はそうこわくないものであった。機銃弾や小銃弾は、一寸した蔭さえあれば絶対安全であった。私達は交替して眠った。上の方を小銃弾や機銃弾がヒュルヒュルといて、小鳥の声のような音をたてて通った。私はこの戦闘で、砲兵と歩兵の関係がよくわかった。歩兵の第一線の戦闘を助けるのが、砲兵の本来の任務であるということがよくわかった。眼鏡で第一線の戦闘を見ているのは面白かった。

日本軍の飛行機も相当数来て爆撃していた。そのうちの二機が遭難信号を出して墜（ち）ていくのが見られた。私達の方には犠牲者はあまり出なかった。津田一等兵が頬に軽傷をうけた。彼は後に重傷といって故郷の役場には報告がいったそうだ。私達の中隊は三門編成で臨時の中隊長が、大隊本部の中島中尉指揮、小隊長米山少尉、第一小隊長伊藤中尉、観測下士官畑中軍曹であった。

支那の民家の入口には、字を書いた紙がはりつけてあることが多い。私達の滞在していた地では「紫気東来」とか「身肥不怕三冬雪」とか「家畜有妊」とかお目出たい文句が多かったが、しかし交戦地帯の民家には「殲滅東洋鬼」というような民族の戦意昂揚のための文句が多かった。

住民は殆ど逃亡していなかった。あるところでは老農夫が殺されて、そのかたわらで老嫗が日本軍の進んで来るのをかまわず大声をあげて泣いていた。私達の進んだところには、敵軍の死体はごくまれにしか残っていなかった。私達の中隊から伊藤中尉が、砲一門をつれて、分遣されていったが、その方では二番砲手南里一等兵が大腿骨折の重傷、一番砲手の笠原一等兵が足に負傷し共に後送された。浜本兵長は砲隊鏡をもってその方についていったが、彼は新兵をよくいじめる男であったが臆病で戦がこわくてたまらず、馬に足を踏まれたといって、戦線につくのをやめた。伊藤少尉は軍法会議にかけるといつていたが、そのままになった。

この戦闘では日本軍は約三里前進の予定であったが、あまり敵の抵抗が強いので、それが出来ず二里位前進してひきかえすことになった。ひきかえすことになってから、民家を焼き払えという命令が出た。米山少尉も火をつけていた。民家の焼けるのは戦地ではなんのスリルも感じられない。

私は空になった民家で食糧をさがした。卵と馬鈴薯を若干発見した。支那酒がかめに入れられていたのが青い焰を出して沢山もえたということだ。

日本軍が引き返す直ぐ後から支那軍が迫って来た。それで急いで歩いた。

私は測遠機手であると共に、観測係下士官の当番兵でもあった。宿舎につくと下士官の寝るところを作ったり、下士官の食物を用意しなければならなかった。雨の降る日があった。泥の中を行軍した。観測係下士官が私の仕事の多いのを見て、泥靴を洗うのを青山一等兵に命じた。青山はそれは私の仕事だからといってやらなかった。私は忙しくてまわりきらなかった。青山がサボっているのを見つけて、観測下士官は猛烈なリンチを加えた。私達は宜昌への渡河点についた。戦場では上官にも敬礼しない。ただ連隊長以上位の人にはめったに遭わないが、遭うと敬礼することになっていた。渡河点では第十三師団長内山中将が、すごい馬ののって威風堂々としてやって来た。皆停止敬礼を行った。しかしこれもものんびりしている宮川一等兵は敬礼しなかった。伊藤中尉が「こらお前はなぜ敬礼せぬか」といつてなぐった。「あれを誰と想うか」と宮川一等兵は「ハッ、連隊長殿であります」といつた。そこで彼は又一つなぐられた。かくして戦闘は終わった。私達は又紫金嶺に帰った。私たちは砲兵の残留者にむかえられた。その時は嬉しかった。

戦闘より紫金嶺に帰る最後の宿営のときであった。

「ばくち」の大石<sup>ウツシ</sup>一等兵は、私達同年兵を全部よんで殴った。理由は私達が戦闘間にご馳走集めに努力しなかったため「不味いものばかり食った」というのであった。けれども今回の如き急な戦闘間、それを要求するのは無理であった。

## 江北作戦

紫金嶺の生活は変わりないものであった。古い兵隊にこき使われることであった。指揮小隊長が結核にかかった。当番津田一等兵がずっと付き添った。

私は米山少尉を中隊の最も温順な馬にのせ、病院につれていった。彼はだんだん結核が悪化し紫金嶺の病院から、漢口の病院に後送されそこで死んだ。長野県の人で幹侯<sup>幹侯</sup>出身でよい人であった。指揮小隊の私達が上等兵に進級したときは、ルビークインという煙草をくれた。私は煙草をのまないいで、その煙草は他の人にやった。指揮小隊長の後任は伊藤少尉であった。

間もなく初年兵が入隊した。彼らは主として大阪、滋賀、北陸方面の兵であった。心身共弱く、私達は初年兵が来たから菜ができるだろうと思つた期待は裏切られた。

中隊の初年兵教官は伊藤少尉であった。彼は幹侯出身であったが、私達のときの教官右田道哉氏が士官学校出身のよいところを持つていたのに、伊藤氏は自分だけ日蔭に入り、上着をとって教育するという風であった。私達は春の中頃討伐に出かけた。紫金嶺から北方二日の行程のところであった。しかし今度は敵には全然会わず、帰ってきた。

帰りは非常に急いだ。時あたかも四月二十九日で天長節であったので、私達は明日は天長節だから、それを祝うために急ぐのだろうと思つた。帰營すると果たしてその夜は各人に一升ずつ位酒が渡った。私達はよい気持にそれを呑んで酔った。ところが深夜出発準備完了、という命令が下つた。十二時までに厩から馬をひき出し、完全武装をし所定の位置につかねばならない。それを終わり行軍に移った。酔って行軍するのが如何に苦しいか、経験しなければわかるまい。眠りながら行軍すると、馬のしりにどすんとぶつかる。馬も眠いと見えていつもは非常な荒馬でも蹴らない。こうして又当陽、荆門と行軍し、荆門から戦場に入った。いよいよ交戦地区に入る前のところの宿営で、私は厩当番についた。

雨になった。野戦では馬は両方に杭をうち太い綱を張って、その綱に馬をつなぐことになつていった。あめの中をどうかした拍子で馬が放れる。そうすると私達は雨にぬれながら、走りまわって、つながなければならぬ。全身ぬれぬところは無い程ぬれて、寒

くてしようがなかった。そして夜三時頃出発準備完了であった。私はその時も観測係下士(官)の当番であったので、暗闇の中、馬に鞍をおき完全武装をした。今から思えばよくあんなことが出来たと思う。やはり命がけであったのだ。

雨にぬれたざる滑る道を進んだ。夜明け頃、畑の中で雨にぬれ、寒さにふるえながら朝食をとった。今度の戦闘では敵にはあまり度々あわなかった。第二小隊長としてついてきた下川準尉は、兵隊をこきつかい、暴力をふるう人であったが、臆病という点では定評のある人であった。私達が放列をしとき敵の弾がどんとどんとんできた。そのとき下川氏は真つ先に逃げて「兵隊の飯を何十年も食っていて、弾に当たったといっっては笑われるかなあ」と言った。そんな考え方もあるかなあと思った。最後の到達点は敵の連隊本部のある点であった。その地点の二千米位前の岡にいたとき歩兵が盛んに機銃をうっていた。敵の連隊本部の付近を支那軍の兵がたくさん逃げていた。敵の機銃弾は少しもあたらなかった。連隊本部で私達は宿泊した。そのとき内藤大隊長が鳥をうちにくから、護衛にいけといわれて行って行った。あまり獲物はなかった。

いよいよ部隊は帰ることになった。その時一つの事件が起った。某上等兵が馬に腹を蹴られるということであった。腹部を蹴られたとき最も恐れるのは、腸が破れることで、ほおっておけば死ぬ。私はその上等兵を野戦病院まで担架でつれていくことを命ぜられた。雨が続いていた。ぬかるみの道だ。骨がおれることと思う。六人の兵で担架を運ぶことになった。本隊の方は一列縦隊になってのろろ進んでいた。私達は本隊の通ったのとは別の道を並行して進んだ。水はへそのあたりまで来ていた。雨は降っていた。民家のあるところにつくと前に部隊が通ったあとらしく牛の糞で作った燃料をもやしてあったので、それで暖をとった。逃げおくれた支那人を連れて来て担架をかつがせたが、逃げおくれた人たちは弱いものばかりで、役に立たなかった。夜おそくなつて宿舎についた。そして野戦病院に引き渡しを終わった。宿舎では私達は骨を折ったからというので、別室にいられ優遇を受けた。

当陽から紫金嶺までの帰路は約十五里くらいあって急を要しないときは、二日の行程である。私達は戦闘を終わって帰るばかりであるから当然二日かかって帰るべきであった。しかしこの戦闘に代理中隊長となつていた熊谷少尉は、早く帰って戦塵を洗いたかったのか、滅茶苦茶にいそいだ。既に晩春であった中支は非常に暑かった。山砲の行軍は四十五分行軍して、十五分の小休止である。その小休止の間に馬の荷をおろし馬に水飼しなければならぬ。一番下っぱの兵は休むひまはなかった。昼食のときは普通大休止、一時間以上である。馬の荷をおろし、馬に食物<sup>を</sup>やり、飯を炊き食事をおわらねばならぬ

い。それなのに今度は昼の大休止四十五分であった。私達一番こき使われ組は休むときはない。紫金嶺の前で泊上等兵は、股ずれと疲れて歩行困難になった。私達はどうか中隊の広場まではたどりついたが、馬からおろした班長の鞍を部屋まで運ぶのに困難を感じた。

### 初年兵教育

私は突然初年兵の観測教育の助手を命ぜられた。宜西突破作戦のとき、代理中隊長としてきた大隊本部の中島中尉が、私の測遠鏡の精度がよいといっているので、このことになつたらしい。場所は大隊本部で、第一大隊所属部隊の初年兵教育である。助手となる曰常生活はのんきであった。測遠鏡の本に書いてあることをひと通り教えればよかった。班が三班に別れていて、一つの班を私だけで受けもつた。私の班が一番成績が悪かった。困つたことだと思つていたが、出身中隊別の競争がひどくて、班別の競争はなにもないので助かった。

食事がひどく悪かつた。もう所謂大東亜戦争が近づいていたので、その方に輸送力を奪われていたのであろう。一ヶ月高野豆腐と昆布ばかり食つていた。

教育を了つて査閲があつた。いつも成績の悪い私の中隊の兵は非常によい成績であつた。それから測遠鏡の方は、私の中隊の鷺田二等兵が、私の測距したのと殆ど一致してしまつた。自分の中隊出身であるので、何か変な目で見られはしないかというような気がした。

査閲が終わつて解散の会食をやつた。大阪付近の兵隊は酒宴になると、俄然元気になる。皆でクリークの魚をとり御馳走をこしらえ支那酒をのんで「石の地蔵さんのーえ」<sup>(歌)</sup>等うたつて騒いだ。そして中隊に帰つた。

話は少し前後するが、その間におこつたことを記す。

当時馬に仮性皮疽という病気がはやつた。ひどくなると死んだ。指揮小隊の第一観測手浜本兵長の馬、海下は非常にくせのある馬であつた。浜本兵長が馬を粗暴に扱うので、益々その悪癖を助長された。そしてその馬を世話するのが私であつた。あるときは馬に胸部をいやという程蹴られた。海下が仮性皮疽にかかつた。私はそれを大隊本部の獣医のところにつれていかねばならなかつた。

海下の手術をし治療するのはずい分骨がおれた。ただ馬の治療の順番を待つ間、春の日を浴びながらひる寝するのはよいものであつた。下士官を長くつとめ準尉になつた下川準尉は兵をいじめこき使うので定評があつた。

中隊本部では当番にいつも芋を焼かせ食った。また兵隊を一人使役に使ってトマトを作らせ、よいところは一人で食っていた。ところが盲腸炎になり当陽の病院で死んだ。

その報が中隊に入ると兵は皆喜んだ。ただ一人彼に特に可愛がられた馬匹係の兵が「惜しいことをした」と言ったそうである。

慰問団が一回来た。漢口をすぎ遠くこの地まで来てくれたのはよくよくのことであった。女三人、男三人位の仙台の人達であった。歌ったり踊ったりしたが、肥った女の人艶っぽい声を出して、うたったので兵達が喜んだ。慰問団のあとで、私の中隊の加藤上等兵が劇をやった。加藤は本職の役者で皆を盛んに笑わせた。慰問の人たちまで盛んに笑った。映画は一回来た。エノケンのものであったがあまり面白くなかった。

大隊長達はピー屋の女将たちとよく麻雀をやった。それから兵を動員して日本家屋を作らせた。新任の軍医のところは初年兵をつれていったら「あんなにして兵をこき使うので病人が増えて困る」とこぼしていた。

その軍医さんは比較的好い人であったが、日のたつにつれ他の軍医さんと同じようになつた。

大隊長は要塞重砲出の人であるそうで、揚子江沿岸を実地測量させた。私は一番下の兵隊であるので、支那馬に乗って三里位の道を毎日通った。そして測量に従事した。その揚子江の向こう岸は敵地であつて、宜都という美しい街があつた。眼鏡で見ると、敵の歩哨が交替しているのなどが見えた。兵隊達は此の次の戦は重慶と宜昌の中間の万懸攻略だろうか、又はあの宜都攻略だろうかと話していた。まだ当時は日本軍の負けることを知らない時代だったから、兵の話も景気がよかつた。

## 長沙作戦

日本軍が所謂大東亜戦に移るため、兵力を佛印方面に移動させていた。それを牽制するため、湯温伯將軍が攻勢に出た。それに対抗するための戦が長沙作戦であつた。

長沙は前にも一回攻略したが、それを確保するには大軍を必要とするといふので、放棄してあつた。

住みなれた紫金嶺を後にして、水匠店、当陽、沙羊鎮を通つて漢口に向かつた。いつもなれた行軍である。その年の初年兵は途中から行軍不能になるものが多かつた。漢口に着くすぐ前に宿営したときである。その地は大豆が非常に茂つた村であつたが、蚊が多かつた。私はまだこんなに蚊の多い土地を知らない。馬繫綱につないだ馬が、蚊に攻められて狂気のように動いた。その夜既当番に初年兵の観測兵上杉義一があつた。

夜明頃蚊に攻められて放馬した。荒馬、海下をつかまえようとして腹を蹴られた。

観測下士官木附伍長が数人の兵をつれ、戸板にのせて入院させるため出発した。その日の夕方私達は漢口の兵站宿舎についた。二、三日後私は海木伍長と一緒に外出して漢口の病院に上杉を見舞つた。丁度その時人の好きそうな軍医さんが居たので、上杉の容態をきくと「手術が順調にいつて心配ない。馬に蹴られてから相当時間が経過していたので普通なら助からぬのだが、朝食前に蹴られたので腹の中が空であつた、それでよかつた。何故もつと早くつれてこられなかつたか」と聞かれたので、「街道に出てトラックに乗せようと思つて待つたが、なかなかトラックが来なかつたのでおくれた」と答えた。

漢口からの兵站宿舎には、いろんな部隊が次から次に、長沙作戦に加わるために入つて来た。ある部隊は駱駝をつれて来た。おそらく此の部隊ははるばる駱駝の居る蒙古の地から転戦して来たのだろう。

漢口宿舎では服から靴まで新品が渡つた。その中に凍傷薬があつた。まだ九月の初とこのにこんな薬が渡るようでは、こんどは長期にわたるのかなと思つた。いよいよ明日宿舎を出発するとうきになつて新品の私の靴がなくなつた。当時の日本兵は、物がなくなれば自分でなんとかして間に合わせなければならぬ鉄則があつた。私もその法則に従う他はないと、覚悟をきめた。もし盗む現場を発見されると、ひどい目に合うのはわかっている。夜になつて隣にねている大隊本部に泥棒に入った。首尾よく靴をとつてきた。足に合わせると小さすぎてだめだつた。盗まれた人は私と同様困る。すぐ又気づかれることなく返した。そこで他の手段を考えねばならなかつた。その日到着した歩兵部隊があつた。おそろくつかれてぐっすり眠っているにちがいない。こんどは成功した。全くいまから思うといやなことだつたが、兵が発砲してうらみもない人を殺さねばならなかつたのと同じではなかつたかと思う。

漢口で小城少尉が中隊に来た。紅顔の少年といつて好い位であつた。士官学校を卒業した本職の軍人で、卒業成績も十位以内で将来有望の軍人であつた。しかしこの人は典型的な士官学校出であつた。中隊長右田中尉が人情味あるのに較ぶれば小人であつた。あるとき中隊の将校と一緒に飯を食つているとき将校当番が第一に中隊長に給仕し、その後の順序がまちがっているといつて「何故建制順に給仕をせぬか」といつて怒つた。

\* 建制順＝組織間であらかじめ決まっている順序。

漢口の埠頭で乗船して、揚子江を廻り洞庭湖に出て岳陽に上陸することになった。

漢口埠頭で大休止中に巡察中の他の隊の将校が、兵が敬礼しないといつて怒り、津田一等兵の目を殴り怪我させた。私達は部隊として休憩しているので決して個人的敬礼の必要はなかつたのだ。当時の将校達の気持がここにも表れている。

漢口埠頭では私は馬を船に積み込む使役に出た。私達の隊が昭和十二年九州を出るときは船に馬を積み又杭州灣敵前上陸には馬をおろしておるはずだったけれども、もうその経験者はあまりいないのか、私達は初歩から教えられた。揚子江の水流は速いので、皆救命具をつけて仕事した。あばれる馬もあったがとにかく仕事をすませた。埠頭勤務の兵が一人水に落ちたが棧橋にすがりついて上った。

岳陽についた。私達の部隊は岳陽から山道を通って南下することになった。第一陣地ではトーチカが見えていたので、砲撃したが敵はいなかった。敵の逃げ方は非常に速かった。追撃の日が続いた。民家に入り宿営すると殆ど完全に何も残っていない。所謂空室清野という方針で、家の中にも畑にも何も残さぬという方針であった。

私はやっぱり測遠機手であった。後藤上等兵が測遠機馬をひいていたが、馬の調子が悪くて度々ころんだ。それをおこし部隊に急いで追及しなければならなかった。私はそのため非常に疲れた。

敵の兵営は元の大地主の家ではないかと思われた。大邸宅の塀をまわした家が連隊本部になっていた。これはおそらく一九二七年頃の蒋介石らの北伐時代、大地主から没収した家ではないかと思う。この兵営の壁には「還我山河」とか「抗戰到底建國必成」とかいう士気を鼓舞する文字が書いてあった。

はじめのうちは宿営についていたがだんだん行軍が急になって、後には先頭をいく歩兵が敵と遭遇して、戦火を交える間だけ、馬の手綱を持ちながら休息するという状態になった。食事は指揮小隊の器具班他若干の兵が途中で飯盒炊きをして、後で追及してくるという非常な状態となった。副食の間に合わないときは携帯している粉末調味料をかけて間に合わせた。

砲列をしくことは少なかった。というのは蔣軍は、強敵に対しては退却し、弱敵に対してはむかうという方針らしかったからである。ときどき砲撃をしてきたが、目に見えて有効な射撃をするということはあまりなかった。ただ一度高地に砲列をしいたら、下に兵舎がありそこは支那兵が多かった。それに向かって火弾を撃ちこんだら火災が起った。敵はあわてて逃げ出した。逃げる兵に向かって弾を撃ち込んだ。その時が長沙作戦間の最大の私達のおさめた戦果であった。

山地を越えると湖南の平野であった。湖南稔れば天下飢えず、といわれる豊かな地であった。そしてところどころに城の如き巨大な城壁の廟があった。

この戦闘の特性はその昼夜兼行の猛行軍にあった。私もすっかり疲れ、上着を脱いで行軍しておったが、上衣を三度も落した。しかし私は各隊の人に知人があったので、その人達によって上衣は拾ってもらった。

夜間、相当大的な河を渡河したことがあった。腰までくらい水につかった。バタバタという音がした。あたかも何か機械が廻っているような音であった。こんな地に動力機があるはずはないと思っていたが、帰路そこを通ったので、特殊水車の三十尺位下の水面から、水田に水を汲みあげるように出来ているもので、その巧妙な工夫に感心した。

その河を渡って未明、湖畔の小さな町に出た。そこでは逃げおくれた兵が数名捕えられた。その町は急をおそれたらしく、家財等そのままにして逃げていた。豚もいたし、まだ逃げおくれた老人も残っていた。私達は豚と菓子と酒に舌つづみをつめた。この街でひまどって私達の隊はすこしおくれたので、その後の行軍はおそろしく速かった。

長沙作戦では赤痢患者が多く出た。血便を出しながら行軍しなければならぬ状態では悲惨であった。それまでに中隊では負傷者が一名出た。それは私達が進んでいると弾丸がピューピュー飛んで来た。その弾にあたって肺を撃ち抜かれ血をふいた。しかしその兵は助かった。私は路ばたの水溜りの水を呑んだ。したら腹がわるくなった。どうもその水になにか入っていたらしい。しかし水が少しづつ流れていたので、毒がうすまって大したことはなかった。馬も非常につかれた。私が新兵のときに世話をしたことのある海桜というごく温順な馬がいた。それは疲労して死んでしまった。そんな馬が他にもあった。

行軍は益々速くなっていった。中隊からも後部の方におかれてしまった者が出て来た。私達が宿舎についたとき、その後れてしまったものを連れて来るため、各分隊より兵を出して迎えにやった。私達は所定の如く馬の手入れをし、食事を終り寝ようとした。そうすると前溝計吾という正直な、おとなしい通信兵がいない。それで皆で三十分位さがした。竹林の中に眠っているのが発見された。初年兵で体力がつかけて眠っていたらしかった。

前溝が居たので皆眠った。

あまり眠らないうちに中隊の竹本曹長が敵襲だ起きろといってきた。起きると私に手榴弾を渡し、竹林にかくれて敵が攻めて来たら投げよと命じた。私は竹林の中に入っていると眠くてもしょうがなかった。

敵の進軍ラツパ。あの支那ソバ屋のラツパのような音が聞こえてきた。「ああ、敵が来ているな」と思ったがあまり眠いのでフラフラしていた。幸(い)、敵は私達の隊は襲わなかった。しかし銃声がたたくさん聞こえた。

翌朝又私達は行軍をはじめた。途中、支那兵の死体を沢山見た。そして遂に珠州に到達した。街には入ることを禁ぜられて、近所の丘の上に砲を上げた。見ると向こうの方に洞庭湖に流れ込むきれいな河があった。その河を渡って逃げる支那兵が見えた。そし



てその敵兵の射撃をうけ一名負傷した。珠州の付近の鉄道には日本軍の爆撃のあとが見られた。

丘の上では中隊長と指揮小隊長とが「困った困った」といつていた。よく話を聞いてみると昨夜おくれた兵を迎えにいった私達の中隊の兵が、途中で小休止のときあまり疲れていたで眠ってしまった、行方不明になり、そのうち西郷上等兵及び初年兵一名が、朝死体となり発見され、五島出身の原田一等兵が行方不明となった。西郷上等兵は高等農林出身である。そういう事故は中隊としては不名誉なのでそういつていたらしい。ところが昨夜の状況が判明するにつれ事態はもっと重大であった。夜襲をうけた第二中隊は死傷六十名で、中隊の三分の一はやられ、もう部隊としての編成が出来なかった。私と観測教育のとき知り合いになった人も数名死んでいた。それから連隊本部も襲われ二十名位の死傷を出した。私と同じ村出身の金子上等兵も口に銃撃をうけ、かつて一中隊長であった池知中尉も重傷であった。

珠州からひき返すことになった。その途中では既に後から支那兵がおいかけて来たので時々砲をうった。しかし依然として帰路もいそいだ。その理由は後でわかったことであつたが、中支の日軍主力が、長沙に向かったため守備のうすくなった宜昌方面に敵が盛んに出て来たためであつた。昼夜をわかたぬ戦闘行軍の後、私達はやまと昼、止まる事が出来た。私はクリークで襦袢を洗ったら、白い汁が洗っても洗っても出た。

ある民家に宿営のときである。私はその家の水を飲んだ。ところが猛烈な下痢におそわれ、翌日はどうしても行軍出来なかつた。それで馬に乗せてもらった。私が馬にのつたために歩かねばならなかつた馬匹係の兵は私にさんざん小言を言った。

(河を)渡河するとき、河原に地雷がしかけてあつたので、歩兵が負傷したことがあつた。湖南の秋は美しかった。平和なときこんな地を歩くことが出来たら楽しいだろうと思われた。苦しい行軍の後、我等は岳陽に着いた。長沙作戦は苦しい行軍の連続であつた。私も命がけて頑張りぬくことが出来た。

岳陽から汽車で武昌の南六里位の紙坊という地に下車し、そこに滞在することになつた。

## 紙坊と上海

紙坊は小さな街であつた。例の如く古い兵隊からいぢめられ、馬の世話をしたり、演習をしたりする日が続いた。私はここで高木、泊、二上等兵と共に兵長に進級した。私は元來歯がわるい。一年半位の戦地生活中に、奥歯がすっかり悪くなった。故郷の家か

ら航空便で五十円送金して貰って、大隊本部の軍医の許可を得て武昌に歯科治療にいった。武昌の兵站宿舎に宿泊し毎日歯科医に通つた。歯科医は日本人でまじめなよい人であつた。若い女の助手も好感がもてた。日本の当時の海外発展組にはずい分質實のものもいた。軍と結託して支那人をいぢめる人もいたが、この歯科医などはよい人で、当時武昌においては唯一の科学的歯科医であつた。歯の治療を終つて又紙坊に帰つた。紙坊にあるとき陸軍軍隊が慰問に来た。軍隊式でぎこちなかつたが、器楽をやつたり合唱をしたりするのが面白かつた。紙坊には日本人が三軒営業してゐた。二軒は兵隊相手の飲食店で、一軒はビール屋であつた。「バクチ」の大石一等兵はそのビール屋に曹長の服を着ていつて、ただで遊んだ話などしてゐた。飲食店の人は私達が紙坊を出発して上海に向かうときは、名残おし<sup>世</sup>そうに送つてくれた。紙坊にも日本軍が所謂、宣撫班を組織してゐた。そして子供を集めて学校を開いてゐた。私と知り合いの三中隊の兵もその学校に働いてゐたが「王さんま<sup>世</sup>つてちようだいね」という歌を子供達に教えて歌わせてゐた。その学童たちは私達が紙坊出発のときもその歌をうたつて送つてくれた。武昌、岳陽間は汽車が通つてゐた。汽車の最前方には地雷よけのために、汽車が一輛つけてあり、もし地雷が爆発しても、その貨車だけがやられて機関車は異状ないように出来てゐた。處々に鉄道警備隊が出てゐた。その分遣された衛兵達のところには、支那人が御馳走を持つて来てくれたそうだ。支那の枕木は鉄で出来てゐた。

大隊長の意志により兎狩をやつた。若干の野兎とノロが獲れたが、それは将校達の口に葬られてしまつた。私は又武昌に行くことになつた。玉井曹長、只熊一等兵他に上等兵一名、及び私であつた。武昌には中隊の直接戦闘に必要な物及び各兵の私物を保管するところがあつた。そこに塚本上等兵という後にフィリップで戦病死したおとなしい兵隊がいたが、私物などはすっかり荒されてゐた。武昌の工場で毎日修理したり、倉庫で整理をしたりして日を送つた。そのうちに私には中隊から帰還命令が来た。ちょうどさきに長沙作戦途上、馬に蹴られ入院した上杉初年兵が退院して来たので、トラック定期便に乗つて紙坊に帰つた。私が中隊に呼び戻されたのは、中隊の南方作戦参加が決まつたので、その演習のためであつた。戦砲隊では航空の模型を射撃する演習を盛んにやつてゐた。

いよいよ出発の日が来た。武昌まで行軍した。武昌で何かの用で外出したとき洋車に乗つた。先に乗つてゐる下士官の洋車がひっくりかえつた。下士官はその洋車の車夫を足で蹴つて金を払わず行つてしまつた。私は気の毒であつたので、自分の洋車の車夫とその下士官の洋車の車夫に金を與へた。

\*洋車＝ヤンチョ、日本（東洋）で発明された人力車、東洋車を略して洋車。

武昌から輸送船に乗った。そのときも私は馬を船に積む仕事をさせられた。船で揚子江を下った。途中大治の港の夕景が美しかったのをおぼえている。長い間歩きまわった中支にも別れをつけ、船は南京についた。南京の市内には入らなかつた。南京より上海には汽車であつた。貨車に乗った。途中は夜で私は下痢をしていたので困つた。上海は新龍華という駅に下り、江蘇省の中学校に宿営することになった。その中学は大きな学校で私達の連隊全部が入ることが出来た。

米英に戦争を布告した十六年の十二月八日は私達はその上海の宿舎であつた。隣に上海警備部隊がいたが、自動車で出勤していたので何かあると思つていた。後で大東亜戦が始まったためということがわかつた。

私達は連隊そろつて演習をさせられた。そのとき私は測遠手であつたが規正板を使って規正しなかつたといつて悪評をうけた。

あるとき小城小隊長が駅に行くといふので、その護衛として駅へいくよう命ぜられた。あの悪癖の多い「海下」の他には馬の都合がつかなかつたので、それに乘つて小城少尉の後を追つた。ところが「海下」が途中から何を思い出したのか、急に向きをかえて反対の方に矢のように走りだした。風が耳のところにピューといつて過ぎるようになった。私はそこで覚悟をきめて、足を鑑からはづして騎銃を背負つたまま背を下にして、わざと落馬した。すこし背をうつたが異状なかつた。馬は厩に一目散に帰つていた。その少し前ある軍医さんが馬に暴れられ鑑をはずしそこなつて、馬にひきずられ死亡したことがあつた。鑑は浅くかけてすぐはずれるようにしておく事が必要である。

連隊長高森大佐は中国人の妾をもちそこから通つていた。彼はあまり上等の軍人ではなかつた。連隊長は交際家であつたので、上海在住の日本人とはよく交際していらしい。あるときその在留邦人が慰問団を組織して慰問に来た。ちつとも面白くなかつた。一中隊の加藤上等兵の方が、もつとうまいのだけれど、連隊長はそれはさせなかつた。上海の街は一度行くことが出来た。兵隊は薄給であるので、私達は何もすることが出来なかつた。一度安い中国料理を食つただけだ。国際都市でいろんな人種がおり、白人の乞食もあり、面白いところだと思つた。

私達は間もなく呉淞の宿舎に移つた。河に橋がかかつていた。これが有名な呉淞クリークだろつと思つた。戦火の跡はもう片づけられて残つていなくなつた。二月初旬出発の日が近づいた。私達は非常に多くの弾丸を輸送船に積まねばならなかつた。乗船の日は私は又も馬積みの使役だ。もう私は馬積みの方は大分上手になつて今度は一番重要なクレーン鉤を馬の綱にかける仕事をした。乗船してフィリップンに向かうことになつた。

## バタン総攻撃

二月初旬、我々は中支をあとにした。船は軍艦一隻護衛の下に船団をくんで出発した。潜航艇に対する警戒のため甲板に砲をあげ又私達は眼鏡をもつて警戒した。私も船首の甲板にいたが、船に弱いので酔つて船室に入った。次第に南下するにつれ暑さが加わつた。三、四日たつうちに船室はたえがたい暑さとなつた。私は着ていた毛糸のジャケツを捨ててしまつた。今後の予測のつかない南方の戦にそんなものを持つて行くのは不可能であつた。

船の機関室の火夫の人達は全く暑そうであつた。一糸もまとわぬ裸体で上がつてきては水をかぶつた。又船の底につまられた馬も苦しそうであつた。馬は寒には強いが、暑さに弱い。中支の二月に順応するように馬の毛は生えているのに急に熱帯の暑さに向かつた。馬の毛は後フィリップン上陸後全部生え代わつて短くなつた。私は毎日船底に降り馬の世話をしなければならなかつた。馬の尿糞の悪臭がこもつて全くいやな気持であつた。

船は台湾南端の良港高雄に入港した。ここで小舟でバナナを売りに来た。私達はそれを買つたが、台湾のバナナは非常に美味であつた。バミール海峽を過ぎ、船はフィリップンのリンガエン湾に入った。ここは日本の勢力下にあるので上陸は順調であつた。当時昭和十七年のフィリップンは日本軍の制空下にあつたので、すべてのことは容易であつた。

リンガエン湾岸のマピラオという村に私達は上陸した。その海岸は一面椰子林であつた。椰子林の中に小さな家があつた。そこが私達の宿舎であつた。現地人がやってきてタバコ石鹼をやる猿のように椰子の木に登つて実をちぎつてくれた。それを私達は下で携帯天幕を拡げて受けた。未熟の実には汁があつた。それは少し青臭いが暑いときは渴きを癒すのによかつた。

間もなく私達は二つに別れ、一つの組はトラックで、それから馬の世話をするものは徒歩で出発した。私はトラックで行くことになつた。道はアスファルトのよい道であつた。中支の戦闘で馬と共に何百里も歩いたことを思えば楽であつた。私達はバタン半島の入口デナルピアンに滞在することになつた。ここには陸軍の弾薬集積所があり、野天で非常に多くの弾薬が集積してあつた。

デナルピアンで私達は宿泊した家は民家であつた。裏に熱帯の果物があつた。名は知らないが無花果に似た黄色の糞臭がすこしする果物であつた。それから大きな木に美味の小粒の紫色の果物もあつた。その木には一方には花が咲き、一方では熟しているとい

う、いかにも南方のものらしい果物であった。

給与係の下士官がサンフェルナンドからマンゴーを買って来たので、分けて貰って食べた。

兵の給与には米軍のを押収したものが多かった。野菜はバギオなどの高冷地から来ていた。

フィリッピンはマッカーサーが司令官となりウェンライト中将がその下で米比軍をもって守っていた。十六年の暮、日本軍は米比軍をすでにバタン半島の中に追いつめてしまっていた。マッカーサーは豪州に逃げていた。ところがバタン半島の守備が堅固で、三度総攻撃をし三度も、日本軍は、多数の死傷者を出し成功しなかった。一度は二個大隊バタン半島に上陸することが出来たが、後援がつかず米軍の戦車の餌食となつて全滅している。攻めたのは日本でも弱兵といふことの定評のある大阪西師団と京都の十六師団であった。私達が後にオロンガポに移ったとき、そこに第六師団所属の人達が、兵站勤務をしていたが、その人達の話の聞くと総攻撃の失敗後、傷兵が続々後送されて来た。その人達が「あきまへん、敵さん強うおます」と言っていたので、全く心配でたまらなかつたと言っていた。

又私達はデナルピアンに居るとき、指揮小隊長の小城少尉より四師団参謀の書いた、バタン敵状という物を読んで聞かせられたが、丁度平家が富士川で水鳥の音に驚いて逃げたあの心理そっくりで、敵を過度におそれていた。例えばバタン半島の河には電気仕掛けがしてあって、それに入ると兵はやられてしまうと、フォックスホールという穴があつて敵兵が地下からひょっくり出てくるとかいう類で、私達が後で実地を見たら全部思ひすこしであった。所謂敗亡の兵が枯木におどろくたぐいであった。

ではバタンは三回も日本軍の総攻撃を撃退したのは何故であるか。私達がバタンを眼鏡で見るとき、敵の砲がどこにあるかちつとも分からなかつた。山のジャングルの中を自動車を通る道が沢山走っていた。そこを弾丸を豊富にもつた砲が縦横に走り、平地を動く日本軍に砲撃を加えたためである。ここが支那における戦闘と著しく異なる点であった。

私達はギナルピアンで観測演習を行った。南方では中支とちがつて距離が近く見えた。演習に行くとき砂糖黍が畑に茂っていた。しかし砂糖黍をあまり嚼ると尿が出なくなつた。私は戦場偵察に行くことになつた。トラックで行つた。バタンの入口の山を行くと處々に米比軍の陣地の跡らしいのがあつた。米式の食器とか衣服があつた。帰りは夜になつた。南十字星がよく見えた。八倍の眼鏡で月を見ると火山の跡などがよくわかつた。

いよいよ夜、中隊はバタンに向かつて出発した。夜明け頃ナチブ山にたどり着いた。

かつてはこのナチブでは日本軍がひどくなやまされたところである。ジャングルの中から米比軍に狙撃され、日本軍は多くの死傷を出した。しかしナチブは友軍の勢力下にあった。

私達はナチブを越えることになつた。ジャングルの中の細道を行かねばならない。私と共に歩いて馬がよくひっくりかえつたので、それを起すのを手伝つて進んだ。道は、深い谷のかたわらを通つた。高いラワンの木がそびえていた。

私達は目的地について陣地についた。観測所は樹の上に作つた。そこから敵方を見る。見ても見てもどうしても敵の砲の所在地も敵兵の姿もわからなかつた。浜本伍長はジャングルの木の間の黒くなつているところを、砲門だといつて小城少尉に報告した。小城氏はそれを信用していた。しかしそれは全く根拠のないためであつた。ある日シンガポールの戦闘で戦い、バタンに移つて来た当時、日本軍の秘密兵器としてあつた臼砲の観測兵が私達の観測所に見せてくれと上がつてきた。そのとき彼らの話を聞いていると、敵は前方の山の独立家屋のところに見れてくると話していた。それで後に中隊長にそのことを報告した。中隊長は後で中隊の砲撃のさいは、専らその地点を砲撃させた。

又第一大隊本部でも敵を発見することが出来ないうらしく、大隊副官が私のところに何か敵を見ないかと聞きに来た。私はその独立家屋を教えてやつた。後、私達がバタン山中に進んだ時、その独立家屋のわきを通つたが、そこには爆撃と砲撃のあとがあり、米比軍の遺棄死体があつた。

私達の観測所は前進することになつた。今度の新観測所はジャングルの先端で、一本の高い木の上に檜をつくることになつた。その付近には敵弾の跡がいくつもあつた。敵はかつてこの点を目標として砲撃したことがあつたのだろう。全くいやな地点である。

しかしその高い木の下に深い谷があつてそこは敵弾から安全であつた。観測所から左方一〇〇米位のところに砲が据えられた。観測所は樹上に竹の床をつくつて、そこにドラム缶を一つあげ、その中に観測機を入れ、観測所から砲の指揮をする小隊長のところには電話を設けた。観測所を作るとき夜間、浜本伍長が喫煙した。それを見つけて小城少尉がひどく殴つた。これは浜本伍長が誤っている。夜間敵前で火を見せることは危険である。上海をおくれて出発した伊藤中尉が来て、小城少尉と代わつて指揮小隊長になつた。四月某日総攻撃が開始された。左前方に見える高さ五百米位のサマツト山は全山爆煙に包まれて姿を消してしまつた。友軍の飛行機は絶え間なく飛来し爆撃をする。私の中隊の砲も撃てるだけ撃ちまくつた。敵方からも砲弾がものすごく飛んで来る。私達の陣地は敵が正確に測量していると見えて近くに弾がどンドン落ちる。あまり弾が来るので、中隊長は一人だけ観測手が残り他は壕に入れと命を下した。今から考えると私はあ

んな下らない戦争になぜ命を粗末にあつたかと後悔する。私が一人残っていると至近弾が落ちる。弾の落ちるときは汽車がスチームを吐き出すときのようなシューツという音がする。それがそのまま落ちるのは百米以上離れているときで、シューツという音が一度消えて落ちるのは至近弾で、その時は熱い爆風を浴びる。私は生きた気がしなかった。詩吟をやったり、座禅をしたり、又私の先祖であり氏神である青幡神社に祈つたりした。敵方の観測どころではなかった。間もなく下から中隊長が降りてこいと言つたので降りて壕に入った。しばらくして又中隊長と私と二人で観測所に昇つた。私は眼鏡で敵方を見たが、一つも敵影を見ることは出来なかった。弾は相変らず飛んでくる。壕の中に入って砲の指揮にあつていた小城中隊長は壕から出ていた尻に弾を受けて後送された。

大隊本部と一中隊を結ぶ電話線が砲弾で切られたのを補修中の通信係の上等兵は背弾の破片をうけた。観測所と砲の間を結ぶ電話線が弾で切られたときに備えて、その間に立ててあつた伝令の一人、大久保初年兵は足に負傷した。私達第一線に居るものにとつては、どこに弾が飛んで来て危険かということがよくわかつている。しかし中隊段列の取手をやっている兵隊は戦間間は後方で飯を炊く。そしてそれを第一線に運ぶ、その兵隊はうっかり危険地域に入つてしまう。大隊段列から一中隊に手伝いに来ていた上等兵が、そのために一名戦死した。

私と中隊長と二人観測所にのぼつていた。中隊長は砲に向かって電話で指揮していた。そのとき又砲弾が飛んで来た。最初は観測所から一五〇米くらい離れれば百米次は五〇とだんだん近くなつて来た。私はこれはいけないと思つた。「中隊長殿、降りましょう」と言つた。中隊長は「うんもう諸元が出ているから壕から指揮しよう」といつて急いでおりた。私もその後から急いだ。私と中隊長が壕に入るや否や又弾が来た。後で観測所が上がつてみると観測所の竹の床は私の坐つていたところに径一尺位の穴があき、私の右側にあつたドラム罐には一寸径の穴が二つあいていた。もしあのとき降りていなかったら私は完全に戦死していた。中隊長は「松浦兵長があの時降りようと言わなかったら俺も戦死していたな」と後になつて言つた。私は今になって他に何人も観測兵が居るのに、自分だけ度々危険に身をさらした愚を後悔する。

もっともあの戦が正しく立派なものであつたら、それを誇りに思うであらうけれども。

\*諸元||性能・諸要素の数値

夜は全員壕に入った。敵の弾は十及至十五糎の砲弾で壕の後の一抱えもある樹が折れる。壕は安全の地にあるので大丈夫であつた。浜本伍長が弾の破片か又は弾によつて飛ばされた石の破片で、頭に小さな傷を受けた。彼はそれ幸いに後方にさがつてしまつた。

翌朝私達は観測所に上がった。眼鏡で見ると前方の山の樹のないところに日の丸が見える。「中隊長殿、前方の山に日の丸が見えます」と報告した。夜間攻撃を行つて友軍の歩兵がそこに到達したらしい。私はそのとき、ほつとした。そして嬉しかった。もうあの危険な状態はなくなつたと思つた。やがて我々の隊に前進命令が来た。中隊の伝令武田伍長の話では歩兵から何度も決死隊が出されたということである。ある決死隊が発射するとき、ちょうど武田伍長が合あわせたが、その決死隊の長の下士官は、頬の肉をピクピクふるわせながら「××以下〇〇名は只今より決死隊となつて行きます」と言つたということである。それ等の決死隊は全部やられたが、最後に成功したのは火焰放射機を敵の銃眼にさしこんださうである。

バタン半島の東、西両海岸を第四師団と第十六師団が進み中央山地を奈良中将のひきいる奈良兵団が進んだ。私達の隊は、その中央突破の組であつた。例の如く砲を分解し馬につんで山地の突破だ。そんな仕事は馴れているので何でもなかつた。ただ一ヶ所だけ馬背で運べず人力で運ばなければならなかつた。

夜はジャングルの中に寝た。高地には蚊が居ないので寝やすかつた。前に歩兵が進み小さい戦闘をやり、私達は殆ど戦う必要はなかつた。ジャングルの中に敵の遺棄したルーズベルト給与の食物があつたので頂いた。私達の隊でフィリッピン人の兵を数人捕えた。中隊長が私を呼んだ。彼等の携帯している、英文日記を読んで見よと言つた。私はその日記を見ると食糧が欠乏しているらしく、食糧をさがしに行つたことや、日本軍の砲弾や爆撃がさかんにあつたというようなことが書いてあつた。そして彼等は「米軍はだめだ、飛行機を持たない」と私に言つた。「私が君達は米比混血児だろ」とからかうと、「ノーノー。アイアムタガログタガログ」とあわてて言つた。タガログ族と言つたのだ。それで私は「我々は君達と同じだよ、見てみてよ、皮膚も髪の毛も眼の色も同じではないか」と言つた。彼等は捕虜収容所に送られた。

フィリッピンの日本軍のうちでは奈良兵団が一番強いさうであつた。歩兵のうちには途中力つきで倒れるものがいた。戦友がよつて助けおこそうとすると「もう俺は駄目だ、君おれのことを家族に話してくれ」と言つて動こうとしなかつた。こういう戦闘では歩兵は砲兵よりつらいであろう。

夕方私達がもう今日はここに停るのかなと思つていたときであつた。前方の歩兵の將校がやつて来て、どうも敵の戦車が見えるから来てくれという連絡に来た。それで伊藤中尉(彼は中尉になつていた)が砲一門を指揮して指揮小隊もそれについて第一線にあることになつた。もう暗くなつて来た。途中歩兵が一人入り壕の中に入つて来た。私達第一線に出て見ると、そこには自動車の通る道が出来ている高地であつた。

早速敵の来ると思われる方面に向かって砲を据えた。最初につかまっていたのは米軍の衛生自動車であった。中に衛生材料をいっぱい積んでいた。ポイズナスと書いて骸骨のマークのついた毒薬もたくさん積んでいた。何に使うのか不明であった。敵はまだその自動車道路が自由に通れると思つてのんびり来たのらしかった。だいたい夜も更けた頃車両の音がして来た。我々の砲前方五十米位に歩兵の歩哨が出ていた。「誰か日本軍か、米軍か」と何度もきいた。答がない、遂に重機が火を吐いた。間もなくヘッドライトが私達を照らした。いよいよ敵の車両が来たらしい。私は測遠機を持っていた。測遠機は山砲一門よりも高価なものである。私のそのときの任務は測遠機を安全に保つことであると思つた。敵戦車が乗り込んで来たら、うまく逃げねばならぬと思つた。砲はそういう近距離では直接照準をやる。二番砲手の高木兵長は砲の照準をピッタリ敵の車両につけ「ヨシヨシヨシ」と言いはじめた。分隊長が「ウテ」と命令を下した。轟然と砲は火を吐いた。数発弾をうった。敵は来た方にひき返しはじめた。そして小銃と機関銃を無数に言うちうった。

夜があけてからの話によると最先頭に戦車が来ていた。そして戦車のわきを徒歩で兵が進み、その後を自動車が進んだということである。戦車は道のかたわらに乗り上げていた。戦車の前の鉄板は砲弾のためにひっこんでいて、貫通はしていなかった。米戦車の装甲の強さがわかる。しかし乗員はあの近い距離からうった弾で、ひどいショックを受けたことであろうと思う。その戦車の後に米軍の自動車が焼けていた。その自動車からは将校が数人出て死んでいた。後になつてその死体はガス壊疽で、五倍位の太さにくれあがり、傍らを通ると息がつかれぬほどの悪臭を出していた。

夜が明けると私達は陣地を構築した。すぐ目の下の谷にはジャングルにかくれて、敵がたくさん居るらしかった。中隊長と指揮小隊長は一番右側の壕に入った。掩蓋も作つた。左側には竹本曹長ひきいる小隊が陣地を入念に作つた。一度擲弾筒でうった米軍の弾がとんできたことがあつた。これは弾道が非常に曲がるので、気味がわるかつた。その上その弾は大きな音をたてて破裂した。これは人を驚かすに役立つ弾であつた。谷の方には米比軍が物の蔭から銃をこちらに向けているのがあちこちに見えた。中隊長は私に壕から姿を外に出して、各地点を測距することを命じた。私は中隊長に「そんなことをすると敵から狙撃されます」と言つたが中隊長は「よいからやれ」と言つた。私は腹をきめて各点を測距したが幸い弾はとんでこなかつた。

竹本小隊長の隊では射界の清掃をはじめた。砲弾は当時主として瞬発信管を使つていた。この弾の先に木の葉でも一寸ふれると即座に破裂するようになっていた。それで砲

をうつ前には邪魔になる木を切り払わねばならない。岡本覺次郎という初年兵と大隊段列から手伝いに来た宮川兵長が射界の清掃をやっているとき、谷の米比兵から狙撃され、宮川兵長は即死、岡本一等兵は腹部に弾を受け苦しうにして後送され死んだ。宮川兵長は肘から先を切断し、他はジャングルの木の皮を削つて「宮川兵長の墓」と鉛筆で書（て埋め）いた。彼の墓には永遠に人が訪れないかも知れない。故郷には彼の手の骨がとどいた筈だ。

眼鏡でよく谷を見ているうちに、一観測手が宮川兵長、岡本一等兵を倒した機関銃の所在を発見した。樹の蔭からなおもこちらをうかがつていた。砲に連絡してそれをうった。成功した。後でその地に行つてみたら、米比兵一名の遺棄死体があつた。

昨夜から連続して働いたため私達は交代で眠つてるとき、私達は米比兵がぞろぞろと後退しはじめたのを見た。畑中観測係下士が、あれは中隊長に報告すると言つた。私達も彼等が戦意を失つて後退しているのを見てそのままにしておいた。

夜になつて米比軍の信号弾が南から北に尾をひいて飛んだ。敵が降参したらしい。間もなく米比軍降服の確報が入つた。夜が明けてから私達は山を下りることになった。途中米軍の兵器が所々にみられた。私達の組はトラックで移動することになった。トラックで移動の途中米比軍の捕虜がぞろぞろ歩いてるのを見た。これが所謂ボタン死行進である。彼等は別に虐待されてはいなかつた。白人やフィリッピン人がぞろぞろ歩いているのである。おそらく戦闘で疲れたのを、炎熱の下を歩いたので、犠牲者が多かつたのであろう。もし彼我位置が変つていたとき、米軍が日本軍をあれよりよく待遇することが出来たであらうか。私はその実情を詳細にしろないのでなんとも言えない。

### マラリヤ禍

私は行く先も目的も知らなかつた。私達のトラックはよく舗装された道を通つて、バタン半島を横断してオロンガポについた。ここは米軍根拠地のあつたところである。私達はここで準備をととのえ、コレヒドール作戦に加わるため待機するのだということが分かつた。

オロンガポは戦火にやられ街は殆ど廃虚となつていた。焼けずに残っているのは街はずれの民家と、大きな建物が二三軒残つていただけであつた。ここにはフィリッピン人が店を出していた。比島の如き酷暑の地では労働するより商売するのが生活し易いのではないかと思う。比島人は機会さえあれば商売をしていた。私は英語を少しかじつていたのでフィリッピンではよく衛兵指令とか歩哨係をしたり、また公私の通訳代理みたい

なことをやらされた。ここでも給与係の久保曹長について市場にいった。市場にはマンガウをはじめ色々な果物があつた。オロンガポにおいては水泳の練習があつた。島を攻めるための用意であつたろう。バタン山中で捕われた米軍の工兵中尉が指揮小隊にあづけられた。彼は炊事の手伝いをした。日本食はあまり口に合わなかつたらしいので、ドーナツを買つて来てやつたが、一度食べたが、よくないと言つてあとでは食べなかつた。彼は米国内で技師をしていたそうで、故郷には妻と子が一人いる、手紙を出せないだらうかと私に相談した。当時の状況ではそれはむずかしいと思われた。彼は私に「あなたは戦争がすんだら米國に來ないか。米國ではあなた位英語が出來れば、貿易商社で使うから」と言つた。

私達はコレヒドール作戦に使う発動機船に砲をつみこみ射撃の練習をした。船が上下にゆれて射撃も観測もむずかしかつた。此等の小さな発動機船は軍に徴用されて遠くここまで来ていたのであつた。

私達の隊はマラリヤに襲われはじめた。中國でも三日熱とか四日熱とかいうマラリヤはあつたが、それは軽いものであつた。しかし比島のは熱帯性マラリヤで実に悪性であつた。このマラリヤも一つの特性は過労した者がひどくかかるといふことであつた。私達の中隊では私達と一緒に入隊した兵が一番苦勞して來た。それでマラリヤで死んだのも殆ど私と一緒に入隊したものばかりであつた。四月頃弾丸を海岸の船着場まで運ぶことになり、苦勞して運んだそのときから、私の体は變であつた。その夜私は衛兵勤務についた。しかしどうしても我慢が出來ず衛兵所でねつてしまつた。翌日軍医の診断を受けた。その軍医は大分県日田出身の人で、私の知つてゐる軍医では最もよい人であつた。

岡本上等兵や増田上等兵がマラリヤにやられて弱りきつてゐるのを、その軍医さんは「おうよしよし」と言つて慈母の子を見る目をしてみしてくれた。ますますマラリヤは猛威をふるつた。全員の97%はマラリヤにかかつた。私達ついにオロンガポに残つてゐた大きな建物に收容されることになつた。重傷と中等度はそこに收容され、軽いものは隊にとどまつた。私も中等度で收容された。死亡者が続々と出はじめた。私達の收容された建物のわきにあつた焼け残つたパン焼きかまどで死体を焼いた。間に合わなくなつて一度に三人焼いた。そして従軍してゐる僧侶出身の兵と衛生兵が形ばかりの式をあげて拜んでいた。

私と一緒に入隊した岡本弥之助、荒木安巳、梶原大次郎、末森邦彦等続々死んだ。ひどいのは朝発病して、すぐ意識を失い、もう夕方は死んでゐた。その中で特筆したいのは福田勝男の死であつた。彼は大村市で自動車の運転手をしてゐたらしい。妻子もあつた。平時は平凡な一市民であつた。彼の屬する第二分隊が一、二名を残してマラリヤに

罹つた。福田はそれらの兵の世話を一人で引き受け奮闘した。炊事から看護まで、そして最後に彼が罹つた。そしてすぐ死んでしまつた。

当時死んだものは皆戦死として公表されてゐる。それはその方が功績関係で有利であつたからだ。又中隊長は、後に私達がフィリッピンから滿州に移り、除隊になるとき言つた。「君達が故郷に帰つて死んだ戦友の家族にあつたら、戦友がはなばなしく戦つて死んだと言つてくれ、マラリヤに罹つて苦しんで死んだと實際を言つてくれるな」と。だからおそらく福田の死も家族の人たちはそう承知してゐると思う。しかし實際は二分隊の戦友の犠牲になつたのだ。彼等の骨の一部分は故郷に歸つた。しかし大部分はオロンガポの焼け残つた民家の庭に埋められ、木の墓標が立てられた。それは既に十余年を経過した今日どうなつてゐるであらうか。

荒木安巳もよい兵で二番砲手であつた。彼の分隊長官崎軍曹が後で話した。「俺が荒木と一緒にマラリヤで寝てゐた。そしたら荒木が眠りからさめて『班長殿、私は今夢を見ました。中隊の慰靈祭に行つた夢でした』と言つた。それから間もなく荒木は死んだ」その話を私達と共に聞いていた初年兵のときの教育係の下士官竹本曹長は「もうその話は聞くに堪えないから話してくるな」と言つた。

私達マラリヤ患者の收容されたところには現地の娘が三人看護に來てくれた。一人は村長の娘であつた。私の病氣がかなりうすらいでから、その娘達とよく話をした。最も美人の娘に私が「スキートハートを持つてゐるか」とたずねた、すると「持つてゐるが、彼は米比海軍の中尉で、今捕虜になつてゐる」と答えた。彼女は心の底で日本軍に敵意を持つてゐた。もう一人の娘は少し茶目であつた。将来薬剤師になるつもりであると言つてゐた。そして日本では女が男の下にあるからいけないと言つた。戦争がオロンガポであるときはどうしてゐたとたずねたら「山の中に逃げてゐた」と答えた。私は比島人は怠け者に見えると言つたら、彼等は口を揃えて「ノーノー比島人は非常に勤勉だ」と答えた。

その患者收容所で私はあるとき米軍の捕虜にあつた。彼と話した。彼は「米軍は今にきつとアリュウシヤンの方から反攻をして日本に勝つ」と話した。「そして欧州方面でドイツが失敗して退却してゐる」ことを話した。彼は航空下士官であつた。私がマラリヤで動けないでゐる時、五月五日、中隊は船に乗つて、コレヒドール作戦に参加した。マニラ灣の入口の小さな島に中隊の船は向かつた。そして何等の抵抗を受けることなく目的を達した。そのオロンガポには日本の巡洋艦「球磨?」が旗艦として二、三隻の軍艦が泊まつてゐた。又歩兵部隊がそこからミンダナオ島に向かつて出發した。その部隊もマラリヤ禍におそわれたらしく、老准尉がマラリヤで残され死んだ話などもきいた。

私達そのマラリヤ收容所からトラックでサンフェルナンド郊外の中隊滞在地に移った。民家に住んだ。私はマラリヤですと体は正常でなかったが、日常の仕事はやらねばならなかった。その地に間もなく内地から初年兵がやって来た。小城少尉が教育係として、はりきって教育をやった。ところが続々と重病人が出て死ぬものも出た。なれない南方では初年兵の訓練等無理であつたらしい。そこで中隊では馬匹の世話と兵器の手入れの他は何もせず食うことと寝ることだけに方針を変えた。私達は終日それ等の仕事の他は寝て暮らした。皆マラリヤの半病人でどうにもならなかった。私はそこでよく現地の人と話した。すぐ兵舎のわきに若い男がいて、終日なにもしないでブラブラしている。私が彼に「君の職業は何か」ときいた。彼は「百姓だ」と答えた。「百姓が何故毎日ブラブラしてるか」と聞くと「雨が降らないから」と答えた。南方とはそんなところらしい。衣と住はごく簡素であるの<sup>(たゞ)</sup>ためその程度で暮らせるのである。又内地のように働いたら死んでしまうであろう。又綺麗な娘がすぐ宿舍のわきにいた。彼女の父は「彼女は日本人みたいに色が白い」と言つて私達に自慢した。日本軍が当時は近所の住民に何等危害をおよぼさなかったことを私ははつきり知っている。風紀上の問題でも現在の米軍よりもっと厳正だつたのではないか。問題は戦争苛烈なときの非常時におこつてゐる。現在の駐日米軍も非常事態におちいるなら決して信用出来ないと思う。

又私は夕方などよく子供等と遊んだ。彼等はマンゴー、パイヤ、西瓜などを売りに来た。私は彼等によく出鱈目のおとき話をして聞かせた。「日本のマンゴーは象のようにでかいぜ」とか「私は昨夜天に昇つてイエスキリストとベースボールをやつた」とか。彼等は面白がつてわあわあいつて話を聞いた。そしてある子供は私を「アポキノ」だと言つた。アポキノというのは何だと聞いたら「神だ」と答えた。私の顔のどこか神に似ていたのであろうか。これは私の一生に特筆すべき名譽である。何となれば子供は最も神に近く最も正直ではないか。

私は内田軍曹と共に数名の兵をつれて鉄橋の警備の衛兵に行つた。そこでも亦現地人とよく話をした。ある現地人は日本兵は上官から殴られてもなげだまつているのか、米比兵はそんなときは上官に抗議すると言つた。又ある若い男で日本の軍病院に勤めているのが「日本の看護婦さんは風呂に入るときズロースをはずすね」と言つた。「そうだ」と答えると、さも感に堪えぬような顔をした。フィリッピンの庶民は入浴をしない。着物を着たまま河で洗うのだ。それから私に「心から」という日本語はどんな意味かとたずねた。「本当にというよふな意味だ」と答えた。するとその男が「病院の××という日本人の看護婦さんに、あるとき××さん、私は心から好きですと言つたら、××さんが私はあなたが心から嫌いですと言つた」と私に話した。そんな現地人と面白く話しながら

私達は一週間の衛兵を終わった。私達の後に私と同年兵で乙種幹候で伍長になった山田卓雄が衛兵司令となつてそこにいった。彼は不運であつた。彼等も至極のんびり衛兵勤務をやつていた。ところが突発事故が起つた。大隊本部が焼けてしまった。ゲリラの放火らしかった。それで警戒が急に嚴重になつた。相変わらず山田等がのんきにやつて、全員眠つてしまつていた。その時部隊の巡察がやつて来て山田等はひどく殴られた。彼等は中隊に帰つてからも亦中隊長からひどく殴られた。

ある日私は小城少尉について巡察に出かけた。そして鉄橋警備衛兵に出た所にさしかかった。するとその近所の人は私を見て大歓迎してくれた。若い婦人等は「マツラが来た、マツラが来た、馬に乗つて来た」と大声をあげた。騎銃を背にして馬に乗つていたので偉そうに見えたのかもしれない。私達はこれから何処にいくのかというのが誰でもの問題であつた。ある人は行き先はオーストラリヤだと言つた。しかし間もなく満州に行くのだということがわかつた。

私達フィリッピン戦で経験したことは敵が沢山の重砲をもつてゐるときは、戦鬪が困難極まるということであつた。「パナマ運河地帯を攻撃する」というようなことは、日本軍の装備では夢想にすぎぬ」ということであつた。

## 満州

我々はマニラを出た。マニラは植民地都市である。都民は一般に貧しいのに、大厦高樓がそびえていた。これは近頃の東京に似てゐるではないか。マニラの埠頭は非常によく出来ていた。横浜などより上等のようであつた。私はここでも馬を積む使役に出た。すっかり馬の船積みは特技として認められたようだ。

船は黒姫丸というポロ船で船団を組んで北上した。船室にギューギューおしつめられ、マラリヤに悩まされ甚だ苦しかった。軍医がよく手当してくれしたが、駄目であつた。台湾高尾に入港し青いバナナを買つた。二、三日たつとそのバナナが食べ頃になつて美味であつた。比島には種々のバナナがあつたがこんな美味なのはなかつた。船は澎湖島に入り、そこで船団をといて大連に向かつた。

大連についたのは七月であつた。私は大連の埠頭に部隊の機材が多く置いてあるので、その衛兵の歩哨係になつた。

当時輸送船を守るための船舶砲兵というのが乗つていた。その将校の人が私達のところ遊びに来て雑談をした。その人が帰つてから船から氷を持って来て、比島から持つて来た砂糖をいれて盛んに食つた。私は又下痢を始めた。どうも私の不心得のため度々

下痢をする癖があるらしい。翌日汽車に乗ってから、その下痢で困った。

満州の七月は比島から来ると急に夏から秋になったような感じがした。そして車窓に見える緑の木々。私達が比島にいたときには、あまりに強烈な日光におさえられ、平地には植物はよく育たず、萱のごときものだけが生えていた。私はこんな涼しい地でなければ生物にはよくないと思った。蘇生したような気がした。汽車は奉天をすぎ開原に着いた。私達はここに滞在することになった。

開原駅に下車したとき事故が起った。喜多上等兵が馬に蹴られた。彼も私と同時に入隊し、頭のよい通信兵であった。いつもなら馬に蹴られるようなこともなかったであろうが、比島でひどいマラリヤに罹っていた。それで体の動きがよく出来なかったのである。開原では既成の兵舎があった。喜多上等兵は軍医に見てもらったが、何でもないと軍医は言った。喜多は指揮小隊の部屋にねていた。苦しそうであった。喜多は私が側に行くと言った。「あゝえらえら」と言っていた。彼は岐阜の生まれだ。私は彼と感情のわだかまりがあった。しかし彼は私にたよりたかつたらしい。実際私がのり出していたら彼は助かったかもしれない。その点今考えると甚だ残念である。遂にその翌日岩崎とか野重とかの同じ通信係の兵にかつがれて軍医のところに行った。軍医は「何だおまえはまだ休んでいるのか」と言ったそうだ。しかし容態を見て驚いて軍医がつきそって、鉄嶺の陸軍病院に入院した。そして院長自身の執刀で手術した。しかしすでに手遅れで彼は二階級進級して、喜多伍長になり白木の函に入ってしまった。腸が切れていた。それからマラリヤで脾臓も腫れていた。戦友の輸血も役にたつた。なかつた。

満州は平和状態で兵営は内地流であった。所謂軍紀、風紀というのがやかましくいわれていた。私達戦場育ちの兵にとっては、全く窮屈な日常生活であった。喜多が死んでからマラリヤ患者をどんどん鉄嶺に入院させるようになった。私のマラリヤもよくなかつた。一寸働きすぎるとすぐ発熱した。遂に入院命令をうけて九月初、鉄嶺の陸軍病院に入院した。私ははじめは軽症患者の方に入れられていたが、急に四十度近い熱を出したため、一番重症者のところに移された。そこは正式の陸軍病院で赤十字看護婦もいた。塩酸キニーネや硫酸キニーネの服用及二時間毎のバグノンの静脈注射を受けて熱は次第に下がった。

当時鉄嶺陸軍病院には私達の連隊の者と同じくフィリピンで働いた戦車隊の者がたくさん入院していた。大部分がマラリヤであった。重患は死ぬものもあつた。又黒水病になつて血尿が出て死ぬものもあつた。

私達より一年前に入隊していた兵が、私が入院中に除隊した。私のところに面会に来ていた指揮小隊の岩橋上等兵に、それらの者達が除隊するときは、送別会を開いたかと

たずねたら、彼は「あいつらが除隊になるとき、なんでそんな事をしてやれるものか」と言った。中支の紫金嶺時代、私達は彼等の泥靴や衣類を整理するため、毎晩十二時位まで働いた。彼等は消灯時間である九時には床に入っていた。私達は常に彼等の鉄拳にさらされた。私達の兵隊生活は過労の連続であった。それでボタンでマラリヤのために死んだものも皆私達の同年兵である。それらの人達のことを考えてでも、私達より一年前の兵等のやつたことは怒りを感じる。更にそういうことを許した旧日本軍の愚劣さに憤りを感じざるを得ない。ことに彼等のうちの永田兵長のためには多くの私達の仲間の顔が紫色に腫れ上がっていたことが度々である。旧日本の軍隊では兵の相互感の対立を暗に助長していたのではないか。

満州の九月はすばらしかつた。ところが十月には雪が降った。私は十二月に退院し隊に帰った。満州の寒さはすこい。ある時私達は開原駅から二、三里離れた旧開原駅に行軍をやつたことがあつた。その時私は一番観測手で乗馬であつた。私は完全防具をつけていた。乗馬するの一人では出来ない。数名の初年兵に尻を押し上げて貰わねば乗馬できなかった。厳寒の満州を行軍してはじめて私は冬將軍というものがわかつた。

ナポレオンの軍が破れたのも冬將軍である。又第二次大戦でヒットラーの軍がモスコの前後数里の点まで来ていながら退却したのも冬將軍が大きく作用している。酷寒の曠野如何におそろしいものか、それを経験したものでなければわかるまい。ことに天幕露営をやるとき等、どうして寒がふせげるであろうか。凍傷が一番おそろしい。内地の霜やけとは全然ことなり、手や足を切断するほどおそろしいものである。旧開原は大都市で周囲に城壁をめぐらしていた。私達はそこの女学校で昼食をした。私は退院以来、頭の働きが少し鈍つたのではないかと思う。小城小隊長の助手として初年兵と共に、観測演習をやつたが、測角測距の精度が非常に落ちていた。おそらくマラリヤの高熱が脳に悪作用をおよぼしていたらしい。それから酷寒のとき、観測機材を扱うのは非常に困難であつた。指を出さねば眼鏡の調節は出来ないし、指を出すと寒にやられるという状態であつた。

私達が待ちに待った除隊命令が十八年一月末に出た。私達はその時一度に春風が吹いて来たような気がした。実に嬉しかつた。

出発の前には後に残る兵達が別れの宴を盛大にやつてくれた。その事も非常に嬉しかつた。私達より古い兵が私達をこき使つたのと反対に、私はつとめて若い兵隊に手伝ってきた。中には若い兵に鉄拳を加えるものもいたけれども、仕事は共にやつた。例えば食器を洗う仕事や馬の足を洗う仕事は初年兵の仕事であるけれども、私達はすすんでそういう仕事をやつた。私の軍隊生活を省みて、若い兵を助けてやつた思い出があるのは



非常に嬉しい。

私達は残る戦友に送られて開原駅で乗車し南下した。釜山で検疫を受け門司に上陸した。三年目の内地である。久留米の西部五十一部隊に入り、そこでいよいよ兵隊生活とも別れた。なつかしい戦友も各々自分の家に帰った。帰宅後私は満州に残った戦友に挨拶を送った。それになりたいし皆非常に温情のこもった手紙を貰った。若い兵隊から温かい目で見られていたことが、私の三年の苦しかった軍隊生活で得た喜びであった。

## Two accounts of the World War II

Nagakazu OHARA  
Osahiko MATSURA  
Hideo HATTORI

I was involved in the edit of the book named “The Springtime Group, good-bye Roppon-matsu-campus” (『青春群像、さよなら六本松』) this past year. While being engaged in this work, I heard a lot of stories of old times. But articles irrelevant to the campus were not to be carried in this book.

So I decided to publish two stories concerning World War II. One is by Mr. Ohara Nagakazu, who is Professor Emeritus at Kyushu University. He received a call to arms before his graduation. It is the so-called “Gakuto-Shutujinn” (学徒出陣) – many students enlisted in to go to the front. He first joined the Sasebo Kaiheidan (marine mass) and next went to the Mine Bomb School (機雷学校) (antisubmarine school, 対潜学校) and then went to the submarine school after that. He became a member of Special Attack Corps (Tokkou, 特攻) for homeland defense war (the Hondo Kessen). It was just before the end of the war. The warships of Japan, that were very few left, were not able to move because of the shortage of fuel oil. Enemies’ airplanes attacked the warships one after another and all of them sank immediately. Mr. Ohara, the second lieutenant of Naval forces (少尉), was looking at the scene through the spectacle. It was the end of the Imperial Navy. Several days later, Mr. Ohara saw the clouds caused by Atomic Bomb from the Kurahashijima island and the war ended before the sortie instruction to him. I heard this story from Professor Ohara himself for the record.

The followings are cited from the introductory article of the war written by Mr. Matura Osahiko. This had already been published as a book. We have the small number of copies of this book since they were distributed only among the bereaved family. Mr. Matsura had been doing the leftist movement while he was attending the Fukuoka High School at Roppon-matsu. Even after he became a student at Tokyo Imperial University, he continued the leftist movement. He was arrested and detained, however, and being converted, he gave up the leftist movement. His grandfather tried to have him apply for military forces. But this attempt became impossible since he had been imprisoned. He was summoned to military forces several years later. He continuously joined many battles in various places throughout Asia. His main battlefields were China, Batan Peninsula and Manshu. When the artilleryman shot the cannon, his assignment was work to measure the position to the target and the distance. He was always in the dangerous front. he is a person who thinks from the weak person’s standpoint. He described taking officers, noncommissioned officers, and soldier’s tricky, non-human actions.

We can learn ugliness and the ineptitude of the war well by reading such records.

キーワード：従軍記 学徒出陣 機雷学校 音楽教育 特攻隊 帝国海軍の最後 原爆雲 戦前の左翼運動  
山砲 観測手 漢水作戦 宜西突破作戦 江北作戦 長沙作戦 バタン総攻撃 マラリア禍 コ  
レヒドール作戦 バターン死の行進

---

1) 九州大学名誉教授

2) 九州大学大学院比較社会文化学府地域資料情報講座